これで甲冑は出來ました。次は馬です。昔の騎士達の馬は、皆それぞれい名前を持つてゐたといふので、彼の白馬にも名前をつけることにいたしました。何か素敵な名前は無いものかと四日間も考へて、とうとう『ロシナンテ』と呼ぶことに決めました。

馬の名前はこれでいいが、自分も騎士らしい、勇ましい名前に變へなければならないと、八日間も考へて考へ抜いた末『ラ・マンチャの住人ドン・キホーテ』と名乘ることにしたのです。

ところが、此處にもうたつた一つ足りないものがあります。古への騎士には、必らず美くしい一人の姫君があつて騎士は何時もその姫君の手袋を兜の中に著けてゐて、若し自分の姫君が世界で一番の美くしい姫君ではないとでも云ふ者があつたら、その不都合者と闘かつて降參させてしまふ、と云つた

やうな有樣だつたのです。ドン・キホーテも、是非ともこんな美くしい姫君を一人見つける必要がありました。

ラ・マンチャ村の近くに、アルドンザ・ローレンゾといふ可愛らしくつて、身體の丈夫な一人の田舍娘が住まつて居りました。ドン・キホーテは前々からよく知つて居つた關係から、此の娘さんを彼の姫君として捕虜の騎士や巨人や惡魔を捧げることに決めました。しかし考へてみると、どうもその娘さんの名前が田舍臭くつて、高貴の姫君や貴婦人の名前のやうに雅やかでないので『トボソなるダルチニア姫』と、これ迄にどんな姫君でも持つてゐなかつたやうな美くしい名前をつけて、呼ぶことにいたしました。

これで準備はすつかり出來上りました。或る朝のこと、ドン・キホーテは甲冑に身を固め、長劍をブラ下げ、槍、丸楯を擔さへ、ロシナンテにうち跨

がり、誰れにも告げずに唯一人、勇氣凛々と朝まだき、冒險武者修業にと出發いたしました。

ところが家を出て間もなく、ドン・キホーテは準備に大變な手落ちのあることに氣がつきました。彼は未だ正式に騎士の位を受けてゐなかつたのです。その上彼は、お噺の本でこんな事を讀んだことがありました。それは、騎士が何か一つ大きな手柄を立てる迄は、白色の甲冑を著けてゐなければならないし、又その楯には自分の紋章を畫いてはならない事になつてゐるのです。

一體どうしたらよからうかと、流石のドン・キホーテもこれには困まり果てて、一そ思ひ切つて歸つてしまはうかと思ひましたが、古への勇士達が、偶然道で會つた偉い方から正式に騎士の位を受けるお噺を思ひ出して、勇氣を取り直ほしました。さうして何か、大手柄を立てたいものだと思ひながら

宛所もなく愛馬ロシナンテを進めました。

けれども殘念ながら、別に大手柄を立てるほどの出來事にも出會はず、その日は靜かに暮れかゝりました。ドン・キホーテもロシナンテもへとへとに疲れ果ててしまつた時、フト行手の丘の上に一軒の宿屋が見えました。

ドン・キホーテは、直ぐ樣これを大きな城廓だと思ひ込んで、昔のお噺にあるやうに、きつと今に城壁の上に兵隊が出て來て、騎士の到著を報ずる喇叭を吹き鳴すに違ひない、とそこに立ち止まりました。しかし兵隊はいくら待つても出て來ず、ロシナンテはしきりと厩に這入りたがつて急ぐので、そのまゝ行きかけました。すると此の時、野原に遊ばせてある豚の群を小屋に連れ歸へる爲めに、豚飼ひがポーと角笛を吹きました。ドン・キホーテは、これこそ我が到著を報ずる角笛だと、馬上にそり返へつて、勢よく宿屋に乘り込

んで行きました。

宿屋の入口には、餘り美くしくない女中が二人立つて居りましたが、ドン。キホーテはこれを見て、城門を散歩して居られる美くしい姫君達だらうと一人ぎめに決めてしまひました。二人の女中は、變な格好をした見知らぬ人が痩馬に跨がつて乘り込んで來たのを見て、キャッと叫んで家の中へ逃げ込みました。するとドン・キホーテは、それを呼び止めて、威儀を正して

『姫君様、どうかお逃げ下さいますな。拙者は決して、他人に危害を加へるやうな者ではござりませぬ。殊に姫君様達の如き身分高き方々に、拙者如何にして危害なんぞ加へませう。』

と云つたので、二人はお腹を抱へて笑ひこけました。女中達があんまり何時迄も笑ふので、ドン・キホーテもとうとうプリプリ怒つてしまひました。し

かしこの時、宿屋の亭主が此處に顔を出したので、何事も起らずに濟んでしまひました。この亭主といふのは、肥つちよで、お人好しで、他人の氣を惡くするやうなことのない人間でしたけれど、ドン・キホーテの格好を一目見ただけで、危なく噴き出しさうになりました。が、じつとそれを耐へて鄭重に、どうかお馬をお降り下さいと挨拶して、どろいろ歡待の用意に掛りました。

ドン・キホーテは、もうへとへとに疲れて、お腹もペコペコしてゐましたので、云はれるままに馬から降りて、あだかも一城の主にでも云ふやうな口調で、此の馬は天下の名馬だから、充分注意してくれるやうに、と嚴かに云つて、ロシナンテを亭主に引かせました。

亭主が廐から歸へつてみると、ドン・キホーテは丁度さき程の二人の女中に手助けてもらつて、甲冑を脫がうとしてゐるところです。胴と背とはすぐ脫

げましたが、兜だけは仲々脱げません。兜を頭にくくり付けてある緑色の紐を切つてしまへば譯ないのですが、彼はどうしてもそれを許さないのです。で、夜つぴて兜を被むつた儘で、飲んだり食つたり寝たりするより外ないのです。しかもそれを被むつてゐては、食事をするにも手助が無くては出來ないのです。

こんな工合で、夕食の時には一人の女中は兜の間から食物を入れてやり、亭主は漏斗のやうなものをこしらへて、それで以て葡萄酒を彼の口の中に注ぎ込んでやりました。お蔭さまでドン・キホーテは、近頃に無い愉快な夕食をすませました。

萬事はかうして滯りなく進んで行きましたが、唯一つ未だ騎士の位を正式に受けてゐないといふ事が、トン・キホーテには氣懸かりでなりませんでした

この問題に就いて、彼は夕食の後打ち沈んで思案して居りましたが、ぞうする氣か急に亭主を呼んで、一寸廐まで來て呉れと賴みました。

二人が廐の中に這入ると、ドン・キホーテは突然ガバト亭主の足もとにひれ伏して『武勳比びなき我が騎士殿よ！貴殿が拙者に一つの恩典を下さる迄は拙者は決して此處を動きませぬ。』

と云ひました。驚ろいたのは亭主です。ドン・キホーテを立たせようと思つて、いろいろしてみましたが、ぞうしても立たないので、とう〳〵何でも希望通りしてやると云ひました。ドン・キホーテは

「武勳比びなき我が騎士殿よ！さらば申し上げます。拙者の希望する恩典なるものは、明日貴殿から正式に騎士の位を授かり度いその一事でございます。」

と云ひました。此の願ひを聞いた亭主は、こんなお客にはいい加減にバッを合はせて置くに限ぎると思つたので、ドン・キホーテの希望通り明日騎士の位を授ける事を約しました。ドン・キホーテは飛び上がつて喜びました。さうして亭主に、今晩は此の城中の禮拜堂で甲冑の夜番をする、昔から騎士の位を受ける者は、その式の前夜、徹夜してお祈りする事になつてゐるから、と云ひました。

亭主は、こいつ面白い事が出來たわいと思ひながらも、いろいろとドン・キホーテを元氣づけました。しかし、此の宿屋に禮拜堂のある筈がありません から、唯今新らしい禮拜堂を新築中で、今迄の古い方は取り壞はしてしまつたから、今晩は城の庭で夜番をしていたゞき度い、禮拜堂が近くに無い場合には、此の式は庭でしてもいい事になつてゐるから、さうして明朝は正式に

位を授けるから、と嘘を吐きました。

式のうち合はせがすむと、亭主はドン・キホーテに向かつて、

「さてあなたはお錢をお持ちですか。」

と、ききました。

「一錢も。でもお錢なんか持つてゐる騎士のお噺は、未だ一度も讀んだことがありません。」

とドン・キホーテは平氣で答へました。すると亭主は、

「そりや大違ひですな。騎士ともあれば皆從者を伴なつてゐて、その從者がお錢や着替へのシャツや、その他の必要品を持つてゐるのです。從者の無い者は、自分でお錢やシャツを、鞍のうしろの袋に入れて持つてゐるのです。だからもうこれからお錢無しでは、決して修業に出てはなりません。」

と注意しました。ドン・キホーテは、なる程と思つて、亭主の注意に從ふ事にいたしました。

さて、いよいよ甲冑の夜番に移らうと、それを庭に持ち出して、そこにあつた槽の中に入れました。同宿のお客達が嘲け笑つてゐるにも構はないで彼は長槍を携さへ、月の光の青白く美くしい庭を前や後と歩るきながら、もつたい振つた眼で夜番を始めました。

此の宿屋に泊まつてゐた一人の馬方は、いつものやうに騾に水を飲ませようと思つて、庭に降りて馬槽を見ると、その中には甲冑が入れてあるのです。ドン・キホーテは馬方がそこに來るのを見るや、

「無禮者！勇武比びなきこの騎士の武具に一指でも觸れてみろ。そのままには差し置かぬぞッ。」

と呶鳴りつけました。

しかし馬方は、ドン・キホーテの云ふ事なんか聞こへない風をして、甲冑をドサリと、庭の眞中に抛り投げてしまひました。これを見たドン・キホーテは烈火のやうに怒つて、キツと天を仰ふぎ、姫君ダルチニアの名を叫んで、双手に槍をリウリウとしごいて、馬方の頭をグワンとひとつ叩きました。さうして甲冑を元の馬槽の中に安置して、そこにブツ倒れてゐる馬方なんぞには眼もくれずに、再び嚴かな夜番に移りました。

ところが、しばらくすると、又一人の馬方が騾に水を飲ませにやつて來ました。ドン・キホーテは今度は一言も云はずにグワントとやつ付けたから耐りません。その馬方の頭は三ツ四ツに割れて飛んでしまひました。

この音を聞きつけて、宿のお客様達はドヤドヤと走り出して來ました。あ

とに殘つてゐた二人の馬方は、友達の仇思ひ知れと、バラバラ石を抛げ始めました。ドン・キホーテは劍をひき抜き圓楯を構へて、

「さア來い！此の惡漢ばら皆殺しにしてくれむ。我と思はん者は進み來れッ。」と、呼ばはりました。

庭の騷動を知つた亭主は青くなつて飛び出して來て、石抛げを止め、猛り立つドン・キホーテを押し靜めて、もう甲冑の夜番はこれでいい。拔身の劍で一寸首と肩とに觸れるだけで式は終るのだからと云ひ聞かせました。

ドン・キホーテはこれを聞いて大いに滿足して、一刻も早く式を濟ませて欲しい、騎士の位さへ受ければ、この城中の無禮者は一人も生かしては置かないと答へました。

亭主はビックリして、早くドン・キホーテを遠ざける工夫をしなくちやならな

ないと、アタフタ帳塲に驅け込んで行つて、そこにあつた宿帳を一冊持つて二人の女中と蠟燭持ちの少年とを連れて戻つて來ました。亭主は先づドン・キホーテをそこに跪まづかせ、宿帳を開いて祈禱書でも讀んでゐる風をして口の中で何やら有難たさうな事をムニヤムニヤ云ひました。それからドン・キホーテの劍を拔いて、彼の首と背とをトントンと峰打ちしました。かうして騎士號授與式は至極簡單に終はりました。

式が終ると一人の女中は新調の騎士の皮帶をドン・キホーテの劍に付け、他の一人は靴の踵に拍車を付けてやりました。鞍置いたロシナンテは直ちにそこに引き出され、ラ・マンチヤの住人騎士ドン・キホーテの冒險武者修業出發の用意はすつかり出來上がりました。亭主は昨晩の夕食の代をもらふ事は出來なかつたけれど、騎士の出發を非常に喜びました。

二

少年アンドレスを救つた噺。ドン・キホーテの歸村。

ドン・キホーテは朝早く宿屋を出發して、道を急いで居りましたが、フトお錢とシャツとを取りに家まで一寸歸へらなければならない事を思ひ出したので、そのまゝ馬をラ・マンチヤの方に向かつて飛ばし始めました。

ところが少しばかり行くと、行手の森の中から人の悲鳴が聞こへて來るではありませんか。ははア、何者か救を求めてゐるやうだな。有難たい。神樣は早速自分に、騎士の務を果たす好い機會を與へて下すつたのだ。それ、ロシナンテ進めッと一散に森の中に驅け込みました。森の中に驅け込んでみる

と、そこには一匹の馬が繋ながれてあつて、その側には一人の荒くれ男が十五歳位の少年を、腰から上裸かにして木に縛りつけて、帶皮でピシヤリひつ叩きながら、

『此の餓鬼め！　よく覺えてろ、眼は開けて口は引きしめてるもんだぞッ。』

と喚鳴つてゐるのです。少年は痛さに耐へかねてヒイヒイ泣き叫んでゐます。ドン・キホーテはこれを見て、荒くれ男に近づいて大聲で、

『ヤイッ。一體どうしたと云ふんだ。刃向かひの出來ない弱者をいぢめると は卑怯千萬！　槍を取つて馬に騎れ、余が相手になつて遣はさう。』

と云ひました。男は腰を拔かす程ビックリして、打つ手を止めました。さうして騎士の姿を見ると、ペコペコして、

『ヘイ、この餓鬼めは俺の羊飼ひでしてな。ところが羊なんかには眼もくれないもんだから、とう〳〵何百匹もの羊を皆逃がしちやつたんでさ。それでこらしめの爲めにかうしてひつ叩いてるんですが、餓鬼ア又、俺が給料を拂らふ事が厭なもんだから、こんな口實を付けるんだらうつてな事をぬかしやがるんです。』

と答へました。

『何だと？　貴樣は此の騎士を欺むく氣だな。此の槍が見へないのかッ。給料を拂つて直ぐこの少年を解いてやればよし、でなかつたら決して承知しないぞ。おい少年や、一體お前のもらふ給料は如何程あるのかな？』

ドン・キホーテがかう云ひますと、少年は九ケ月間の給料をもらふ筈になつてゐると答へました。ドン・キホーテは荒くれ男をにらみつけて、

『ではたつた今、余の眼の前で拂つてやれ。それが出來ないと云へば、殺し

てしまふぞッ。』

と嚇かしました。その男はブルブル慄えながら、それは少し訛が違ふ、そんなに澤山の拂は滯つてはゐない筈だ、それに今は一錢の持ち合はせもないが、少年のアンドレスが一緒に家迄行つて呉れるんなら、云ひなりに拂つてやらうと答へました。しかし、アンドレスは

『親方と一緒に歸へれつて？厭だ厭だ。親方の云ふ事は皆嘘にきまつてる。家に連れて歸へつたら、直様私の生皮を剝いでしまふ！』

と叫び立てました。ドン・キホーテは、

『いやいや、親方は指一本お前に觸れることは出來ぬ。余がしかと申し渡して置くから心配することはない。親方が誓つて、お前に危害を加へないと云ふんなら、親方もゆるしてやる。すれば親方はお前に給料を拂つて呉れるんだ。』

と云ひました。するとその男は、

『へい、勿論お誓ひ致しますんで。さあアンドレスや、これから一緒に歸らうよ。俺の財產は皆お前に呉れてやるからな。』

と神妙に又優さしく答へました。ドン・キホーテは、

『さらば唯今の誓を夢破ることは相ならぬ。余は正義の騎士、ラ・マンチヤの住人ドン・キホーテと申す者、誓を破つた時はお前の首はその儘ではないぞッ。』

と固く命じて、馬に拍車をあてて驅け去りました。荒くれ男は、ドン・キホーテが向うに行つてしまつたのを見とどけると、少年に向つて云ひました。

『おい從いて來い。給料を拂つてやらうよ。それから他にも、色々なものを

呉れてやらあ。』

『ええ行きますとも。約束通りして呉れなきや、あの強い騎士が戻つて來て親方をブチのめしてしまふんだから。』

『そりや誓つた通りにするさ。さうして俺がどんなにお前を可愛がつてゐるかを知らせてやらあ。俺はますます〳〵借金がかさむんで、お前にだつてうんと拂つてやるよ。さ、此處へ來な。』

と親方はアンドレスの腕をムズと引摑かんで、再びそこの大木に身動きも出來ないやうに縛り付けて、荒々しく云ひました。

『さあ行け！　行つてあの騎士に云ひつけて來い。いま〳〵しい餓鬼めッ。お前の生皮を引ッ剝いでやり度いんだ。』

かうして騎士ドン・キホーテの最初の弱者助けの計畫は目茶苦茶になつて終ひました。

さてドン・キホーテは、その森を出てからは、少年を救けた滿足にみたされて、約一里位もロシナンテを驅つて來ると、遙か向うの方から傘を頭の上にかざした六人の人が馬に跨がつてやつて來るのを見ました。六人の人々は馬に騎つた四人の僕と、徒歩の三人の僕とを從がへてゐるのです。ドン・キホーテは此の人々を見るや否や、いよ〳〵待ちに待つた好機が來たと心の中に喜びました。さうして、道の眞中に立ち止まつて、彼等の來るのを待ち受けて居りましたが、彼等が眞近く進んで來ると大聲で、

『汝等よッく承まはれ！　トボソなるダルチニア姫こそ、世界に類ひなき美姫なる事を汝等一同誓ふ迄は、此の道一歩も通す事まかりならぬ。』

と叫びました。絹商人達はこれを聞いて、

『しかし我々はその姫君を未だ一度も見た事がございません。それでどうしてその姫君が世界一の美くしい方であると申されませう。』

と答へますと、ドン・キホーテはカッと怒つて、

『何と？　かの美くしきダルチニア姫を知らぬと申すか。此たわけ者めッ。』

と槍をしごき、ロシナンテの胴腹をポンと蹴つて、手近の商人に猛然と飛びかゝりました。そのとたんに、運悪くロシナンテは石ころに躓づいて、地響立ててブッ倒れてしまひました。ドン・キホーテはポーンと跳ね飛ばされて道の眞中にころころと二三度轉がりました。しまつた！　と夢中に藻掻きましたけれど、重い甲冑を著けてゐるので立ち上がる事が出來ません。ころ〳〵甲高い聲を張り上げて、

『待つたこの悪漢！余の轉んだのは馬のせいぢや、逃げるとは卑怯千萬！』

と、叫びました。

絹商人の僕の一人は、自分の主人が悪漢だとか卑怯者だとか罵しられたので大いに怒つて、ドン・キホーテの槍を引たくつてポキッとへし折つて、それで以て倒れてゐる騎士を、頭と云はず胴と云はず、ポカリポカリと慘々ブチのめしました。餘り力一杯なぐつたものですから、槍の柄は木葉微塵に折れて飛びました。

商人達はかうして行つてしまひましたが、ドン・キホーテは道の眞中に轉がつたまゝ、尚も呶鳴り散らして藻掻いて居りました。が、どうしても立ち上がる事は出來ませんでした。

しばらくしてからのこと、ドン・キホーテの知り合ひの百姓がそこを通

りかかりました。百姓はウンウン云つて漸やつと騎士を自分の驢に乘せて家に送りとどけてやりました。

ドン・キホーテは我が家に歸へると、そのまゝドッカリと床に就いて、それから數日といふものは、讒言ばつかり云つて死ぬ程重い病氣をしました。

村の牧師さんとお醫者さんとは、この話を聞いてやつて來ました。さうして、ドン・キホーテがこんなに氣狂じみて來たのは、あの騎士や巨人や魔法つかひなどのお噺を讀みすぎた故だから、再びお噺の本を讀むやうな事があつては、今度はどんな事をするかもしれないといふので、ドン・キホーテの大切に大切にしてゐたお噺の本を皆燒きすててしまひました。そればかりでなく、書齋の戸を嚴重に釘づけにしてしまつたのです。

しかし、ドン・キホーテは再び起きられるやうになると、すぐに又書齋と

お噺の本とが欲しくなつて、默まつて家の中をグルグルと捜がし始めました。さうして前の書齋の所まで來ると、戸を眺めたり觸つたりしてゐましたが、とう〳〵耐らへ切れなくなつて、僕に書齋はどうしたのかときゝました。

「書齋？　書齋なんかこの家にはありません。」

と僕は答へました。傍にゐた姪も、

「さうです。叔父さんのお留守中に、龍にのつたあの有名な魔法つかひが此處を通りかゝつて、叔父さんのお書齋の中に這入つて行きました。そこで魔法つかひがどんな事をしたか存じませんけれど、しばらくすると、家中をもう〳〵煙だらけにして屋根から飛んで行つてしまひました。それからといふものは、ご本もお書齋も、どこへ行つたかさつぱり見えなくなつてしまつた

のです。」

と説明いたしました。これを聞いたドン・キホーテはいま〳〵しさうに、

「はゝア、そりやきつとフレストンの奴に相違ない。奴、有名な魔法つかひで、しかも俺の仇敵さ。俺が全快したらヒドイ目に會はせてやる。」

と、云ひました。

三

ドン・キホーテとサンチヨ・パンザとの冒險武者修業。
風車との戰。

ドン・キホーテは、それから數週間は至極温和しく暮しました。しかしこの憐れな騎士は、村に歸へつて來る途中の出來事をどうしても忘れる事が出來ませんでした。

さて、この近くにサンチヨ・パンザと云つて、肥つちよでお人好しでその上馬鹿正直でむき出しの一人の百姓が住まつて居りました。ドン・キホーテは、この百姓と近づきになつて、何時もよく二人で話してゐましたが、とう〳〵、もし自分の從者になつて呉れるなら今度の武者修業で征服した島

の中、どれでも好きな島の總督にしてやるがどうだと話をもちかけてみました。總督にしてやると聞いたサンチョは大喜びで、早速従者の誓をいたしました。

二人はいろいろと工面して少しばかりのお錢をこしらへ、その他の準備も整のへて、或る闇夜にまぎれてこつそりと村を脫け出してしまひました。再び痛快な冒險武者修業は始まる事になつたのです。

ドン・キホーテは愛馬ロシナンテに跨がり、サンチョは荷鞍を置いた驢につて、前にも劣らず勇氣凛々〳〵と出發いたしました。

ところが、行く〳〵行くドン・キホーテは考へてみるのに、驢にのつた従者など今迄讀んだ〻のお噺の中にも出て來ないので困つてしまひました。しかし何時の世にだつて自分の爲めにこれ以上の従者がさう〳〵容易すく見つかるものでもなからうと思ひ返へして、その儘驢の従者を連れて行くことになりました。

二人は色々と武者修業について話しながら、涼しい朝風の中を進んで行きました。サンチョは、島の總督にして呉れる事を忘れないやうにと繰り返へし繰り返へしドン・キホーテに頼みました。ドン・キホーテは、

「何かの機會に、余が敵國を征服する事もあらう。その時こそはお前を王様にしてやるぞ。」

と眞面目に答へました。すると、サンチョは

「ぢや神様か何かのお助けで、旦那が戰に勝つて俺が王様になつたとすりや俺の家内は女王様になるべえか？」

と、ききました。

「勿論さ。それや云ふ迄もない事だ。」

「ところが云ふ迄もあるだ。なせつて俺の家内が女王様になつた日には、直ぐ皆寄つて集かつて非道い目に會はせるだらう。正直なところ、俺の家内は女王様なんぞになられる柄ぢやねえだ。伯爵夫人位が關の山だでな。」

「何ア に、まあそんな事は神様のみ心にお委かせして置くんだ。總督位でもいいと思つてりや間違ひつこないんだから。」

こんな話をしながら、二人はいつの間にか、とある小山の崖の上迄やつて來ました。そこから廣々とした平野を見渡たすと、凡そ三四十もあらうかと思はれる程の風車がズラリと立ち並らんでゐるのです。それを見たドン・キホーテは頓狂な聲で、

「はゝア、運命の神のみ手は流石に尊い。我々の捜し飽ぐんでゐた敵の所在を敎へて下すつた。見よ！　サンチヨ、彼處に暴虐極まりない三四十の巨人軍が屯してゐるではないか。余は彼等と一戰しなくちやならぬ。」

と、云ひました。するとサンチヨは、

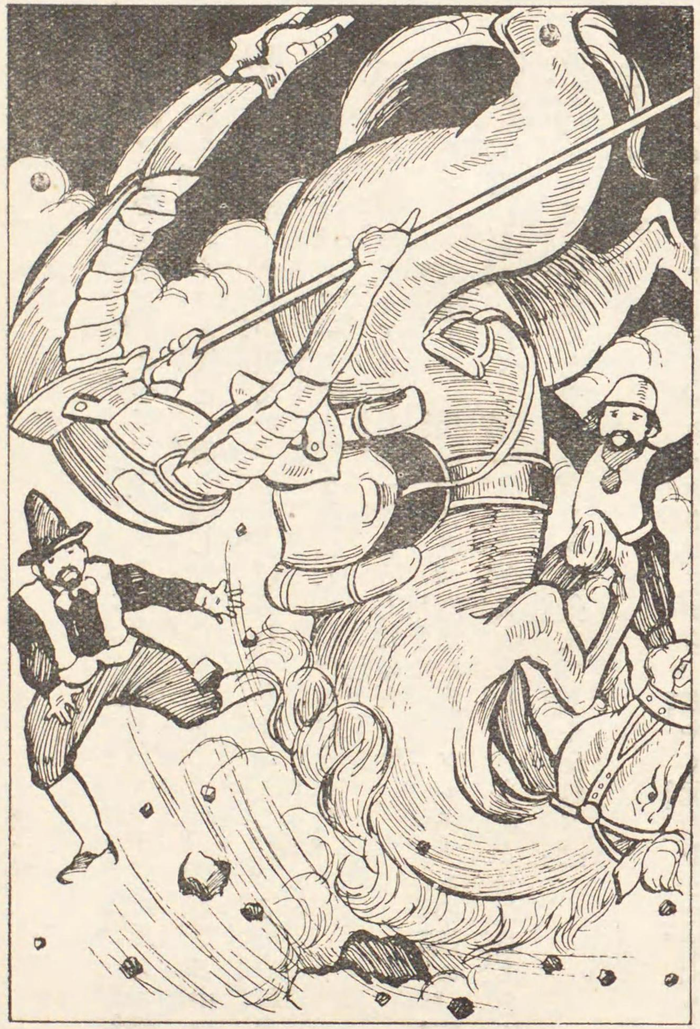
「な何？　巨人！」

と、もうガタガタ慄えはじめました。

「見ろ！　あの向うに長い武器を携さへて立ち並らんでゐるではないか。巨人の中には長さ二里もある長槍を持つてゐる恐るべき奴もあると云ふ話だ。」

サンチヨはドン・キホーテの指さす方を見ましたが、別に恐ろしい巨人の姿は見えないので、

「巨人なんぞ居やしねだ。何アにありや皆風車で、武器のやうに見へるのは帆に違えねえだ。」



と、答へました。

『さう見るのは、お前が未だ冒險した事のない何よりの證據だ。何と云つてもあれは巨人軍に相違ない。奴等を向うにまはして一戰しなくちやならぬ。怖ろしければ何處かに隱れてお祈りでもしてろ！』

ドン・キホーテはサンチョの云ふ事も聞かず、ロシナンテの胴腹に激げしく拍車をあて、

『卑怯者！　そこ動くなッ！』

と猛然と風車めがけて突喚しました。折も折、丁度この時俄かに一陣の風が吹き起こつて、風車はグルグルと廻はり始めました。

騎士はキッとこれをにらみつけて大聲に、

『此の野郎！　巨人ブリアシウの如く、幾本の手を以て來ようとも何程の事

あらう。』

と槍をしごき楯を構まへて、手近かの風車に躍りかゝつて、グルグル廻はつてゐる帆をエイツと鋭どく衝き刺したからたまりません。見る見る中に、馬もろ共にギーツと中天高かく吊り上げられてしまひました。この有様を見たサンチヨは、スワ一大事と驢を飛ばして駆けつけました。

『云はねえ事か。まアなア旦那一體ごうした事だ！』

『サンチヨ！　無事か？　失敗つたぞ。魔法つかひフレストンの奴め、前には余の書齋も書物もすべて盗み取り、今又余を打ちとらんとした巨人を風車の姿に化へて邪魔だてしやがる。ウヌ又覺えて居やがれッ。』

『アーメン。』

ドン●キホーテは足をバタバタさせながら、漸やく元のやうに地べたに降りて、ロシナンテの鞍に跨がることが出來ました。

二人はそれから共に馬を進めましたが、ドン●キホーテは今の戰で、もろくも自分の槍がポッキと折れてしまつたのを大變殘念がつて、サンチヨに云ひました。

『余は曾てこんな噺を讀んだ事がある。或るスペインの騎士がだ、戰爭の眞最中その劍がポロリと折れてしまつたのだ。しまつたと、四邊を見廻はすとそこに樫の大木が一本あるではないか。こいつだと、直ぐ樣それを根こそぎ引つこ抜いて、それで以て慘々敵を掃き飛ばして、後世の人々から「搗碎器」と名づけられて崇められるやうな大手柄を立てたと云ふことだ。此處だ！　今に見ろ、何處かに樫の大木があつたらそれを引き千切つて、一つ大手柄を立ててお前を喜ばせてやるから。』

『しつかり頼んなすだ。……おやおやもう少しちやんと鞍の上に跨がらんと危ねえだ。大變傾むいてるだから。どつか負傷でもしましたか旦那？』

『うむ、少しばかり。されど疼くとも疼いと云はぬが騎士の意地ぢや。たとへ死ぬ程の負傷をしたとて、騎士たるものは決して弱音を吐かないのぢや。』

『それぢや俺ア何とも云ひますめえよ。だがこれからは、疼いところが出來たら、それと正直に云つてもらいてえもんですな。俺なんざ、疼い時にや疼てーッいと大聲で呶鳴らんと承知の出來ねえ性だで、そんな意地つ張りの痩我慢なんぞ出來ましねえだよ。』

その晩二人は、とある大木の下に泊ることになりました。ドン・キホーテは木の枝を一本へし折つて、槍の穗先をそれにくつ付けて槍を修繕いたしました。サンチョは御持參に及んだ大きな壺から、葡萄酒を注いでは飲み注いでは飲み、袋から御馳走を出しては食べて、グデグデに醉つぱらつて高鼾で寢てしまひました。しかし、ドン・キホーテは、お噺の本に書いてあつた通り、騎士の務めとしてその晩は飲まず、食はず、眠むりもしないで、終夜ダルチニア姫の事を思ひ續けて居りました。

翌日二人がラピイチの峠に差しかゝつた時、ドン・キホーテはサンチョに向つて、

『サンチョ、何事か起りさうな所だな。腕の力を試す好機は來たぞ。腕に縒をかけて待つてろよ。だが一つお前に注意して置くことがある。余が敵の騎士と闘つて如何程危險に陷らうとも、決してお前が手出しをしてはならぬぞ。從者たる身で、騎士に刃向かふのは騎士道に叛いた事ぢや。いゝか、解つた

か。』

と云ひますと、サンチョは

『ヘイ、そりや御念に及びませんや。俺ア根つから戰爭は嫌ひだでな。だが若しも敵の騎士が眞先きに俺を目がけて飛びかかつて來た日には、俺だつて默つてゐられねえだから、やつ付けてもいいでごわせう。』

『いやいや、唯余の助太刀なんか夢にも致さぬ事が肝要ぢや。』

『ヘイ、ぢやどんな事があつても俺をあてにしねえやう賴んますだ。』

四

ドンキ・ホーテが金の兜を奪ひ取つた噺。彼が二軍を相手に戰つたこと。サンチヨの驢の盜まれた噺。

ドン・キホーテとサンチョとは、このラピイチの峠で幾度も幾度も冒險をいたしました。

先づ第一にドン・キホーテは一人のビスケエ人と闘つて、敵を血の海の中に叩き潰ぶしてしまひました。しかし彼も亦敵の爲めに兜を半分壞はされ、お負けに片つ方の耳を半分ばかり切り落されました。彼は兜を壞はされた事を大變氣にやんで、誰れか騎士と闘かつて元のやうな立派な兜を奪ふ迄は決して食卓の上で飯を食はないと神かけて誓かひました。

或る日のこと、二人がある村と村との間の大道に馬を驅つてゐた時、ドン・キホーテは突然馬を止めて、何者かを見つけたらしく熱心に向うを見ながら、

『サンチヨ、向うからピカピカする黄金の兜を被つて、連錢葦毛の駿馬に打ち跨がつた一人の騎士がやつて來るが、お前には見へないのか？』

と、きゝました。サンチヨはその方向を見ながら答へました。

『……何アに、騎士なんぞ來やしねえだ。誰か矢張りこんな驢に騎つて、頭の上に何かピカピカ光るものを被つてやつて來やがるんでさ。』

『あの兜が見へないと云ふのか。お前は此處で待つてろ。余は奴と一騎打ちをして、あの立派な黄金の兜を奪つて來る。』

と、ドン・キホーテは馬上に立ち上がりました。

さて、昔まだお醫者様がさう澤山ゐなかつた時分には、誰か熱病やその他

色々の病氣で、血を出す必要のあつた時には（その時分には血を出すのが一番いい病氣療法だと信じられてゐたのです）床屋がやつて來て、血をとる習慣になつて居りました。さうして切つた血管から流れ出る血を受けるために床屋は必ず眞鍮の皿を持つて居りました。この皿は、病人の手とか足とかにしつくりと合ふやうに、その一部が圓くけづり込まれてありました。處によつては、未だ今日でも此の皿を、床屋の目標の棒の頂邊にくつ付けてあるのを見る事がありませう。此の時分の床屋は、こんな風に病人の手術もしたり、散髪もしたりしたものですから『外科床屋』と呼ばれたものです。

今ドン・キホーテが、連錢葦毛の駿馬にうち跨がつて、黄金の兜を被つた立派な騎士と見たのは、雨が降るので新調の帽子を濡らすまいと、眞鍮の皿を被むつて驢にのつて、病人の手術に行く外科床屋だつたのです。

ドン●キホーテは長槍を水車の如く振りまはし、勢よくロシナンテを驅つて、

『覺悟に及べッ。』と床屋にぶつかつて行きました。床屋は危險と見てとるやパット驢から飛び降りて、眞鍮の皿をそこに落つことした儘、命からがら一目散に逃げて行つて了ひました。ドン●キホーテは、どんなもんだいとサンチョを振りかへつて皿を拾はせました。サンチョはそれを主人に捧げながら、

『こりや立派な盥でごわすな。』

と云ひました。ドン●キホーテは皿を被むつて工合をみながら、

『ふん、こりや立派な兜だが、奴の頭が小さかつたと見へて、余にはちと小さ過ぎるわい。困つたことには、一寸缺けてるな。』

と云つて頭を振りました。その皿を被つた格好がおかしいので、サンチョが笑ふと、

『何をゲラゲラ笑つてるんだッ。』

と、呶鳴りつけました。呶鳴られたサンチョが、

『旦那、そりや矢張り床屋の盥に違えねえだ。』

と再び注意しますと、ドン●キホーテは、

『床屋の盥に似たところもあるさ。だが實際は惚々するやうな鈍金作りの兜だぞ。この缺けてゐる所は、誰かお金に困つて鑄潰したところだ。町に著いたならば武具師にこれを持つて行つて、余の頭に合ふやうに叩き直ほしてもらふ事にして、それ迄はこの儘被つてゐるとしよう。』

と、得々と答へました。

その後、或る日のこと、いつものやうに二人が四方山の話をしながら馬を進めてゐると、遙か右の方に當つて、もう〳〵と土煙の立つてゐるのが見へました。素敏やくそれを認めた騎士は、サンチョに向かつて、

「サンチョ、あの土煙を見ろ、あれは大軍の押し寄せて來る兆だぞ。」

と云ひますと、サンチョは

「えゝッ？　成程。あ、あの向うにも土煙が立つてゐる。二聯隊やつて來るだ。」

と不安さうに答へました。ドン・キホーテは今にあの二軍が此の廣い野原で大戰爭をおッ始めるに違ひないと手を拍つて喜びました。サンチョは自分達の身の振り方を聞きました。

「旦那、一體俺達アどうするんだ？」

「解りきつてるぢやあないか。弱い方を助けるんだ。見ろサンチョ、あの甲冑に身を固め、彩どつた楯を持ち、ライオンを引き具して姫君の前をうやうやしく跪まづいてゐるのは、勇敢なる騎士ロウルカルコその人だ。その右に立つ巨人は、ブランダバルバランと言ふ偉い男なのだ。」

ドン・キホーテは、さながらそれ等の人々が一人一人眼前に見へるかのやうに、澤山の騎士の名を並べ立てました。サンチョは今迄魚のやうに默まつて騎士の名前を聞いてゐましたが、

「旦那、騎士や巨人は愚か、人の子一匹見へやしねえだよ。」

と、云ひました。

「何だと？　あの勇ましい軍馬の嘶き、ドンドンといふ太鼓の音もお前には聞えないと申すか。」

『太鼓？　うんにや、羊の鳴き聲なら聞えるだが、太鼓なんぞ鳴つてやしねえだ。』

『怖ろしけりや何處かに隱れてろー　余は單騎敵陣に騎り込んで鬪ふんだ。』

ドン・キホーテはかう叫んでロシナンテの胴腹をポンと蹴つて、眞つしぐらに驅け出しました。サンチョは聲を限りに、

『旦那アーツ。思ひ止まるだーツ。それや眞性眞銘の羊だよーツ。何んにもしねえ羊だよーツ。』

と叫びましたが、早り立つた騎士はそんな事に頓着せず、ウヲーツ、ウヲーツ、と羊の大群の眞唯中に躍り込んで、ロシナンテの脚下に慘々敵を踏みにじり、得意の長槍を上下左右に振り廻はして大奮鬪を始めました。

羊飼ひはこの亂暴を見て大聲に呶鳴りましたけれど、騎士の耳には這入らないのか、ますます狂ひ廻はるので、とう〳〵石拋げを以てピユーピユーと石を拋げ始めました。すると、羊飼ひの拋げた大きな石の一つは、見事にドン・キホーテの胸に、バチーンと命中したから耐りません。彼は鞍の上にガックリと倒れてしまひました。ドン・キホーテは喘へぎ、喘へぎ袋の中から手製の水藥を取り出しました。此の水藥はどんな傷にも即座に効く妙藥だと信じてゐたのです。壺を口にあてて、ゴクリと一口飲み降した時、第二の大石は唸りを生じて飛んで來て彼の口の邊に命中して、壺は粉微塵に飛び散り勢餘つて前齒を全部へし折つてしまひました。

ドッサリと落馬してしまひました。

羊飼達は、もう騎士は死んだものと思つて、殺された七匹の羊を運んで行つてしまひました。サンチョは急いで驅けつけて、主人が慘たらしくやられ

たのを見ると、

『あゝ旦那！　俺があれ程羊だ羊だと云つたでねえか。なぜ俺の云ふ事もちつとは聞いて呉んねえだ。』

と云ひました。ドン・キホーテは苦しい息の下から、

『羊だと？　馬鹿な！　フレストンの如き魔法つかひが、物の形を卽座に化へる事位何でもあるかい。嘘だと思ふなら驢にのつて、あの丘を越えて追つかけて見ろ。もう羊なんか一匹もゐやしない。とつくの昔、騎士や從者に化け戻つて、あの大軍は元の如く行進を續けてらあ！』

と、殘念さうに答へました。

こんな風な冒險を繰りかへし繰り返し（あなた方は、いつかこれ等の一つ

一つの冒險談をお讀みなさる事もありませう。）ドン・キホーテとサンチョとは、或る森林の中に這入つて行きました。ドン・キホーテの負傷を靜かに治療しなければならなかつたからです。

主從二人共連日の戰にヘトヘトに疲れ果てて、森林に這入つた頃には、馬や驢でさへも、力なく立ち止まつてしまひました。さうして、何時の間にか騎士は鞍に跨がつた儘槍を杖について眠り、サンチョは鞍の上にうつ伏して、丁度羽根のベットにでも寢てゐるかのやうにグウグウと高鼾で寢てしまひました。

すると、丁度この場に一人の山賊が通りかゝりました。山賊は他愛もない二人の寢姿をしばらく見てゐましたが、

『さうだ。俺も一匹騎り馬が欲しいんだ。峻はしい山を歩るき廻はつて疲れ

てしまつた。いい工合に驢がゐるが、奴を醒さないやうに盗む方法はないものかな。」

としばらく腕を拱ぬいて思案してゐましたが、やがてその邊から同じ長さの四本の棒を切つて來て、抜き足差し足その棒をサンチョの驢の鞍の下から前後の兩側に一本づつ突込んで地べたに立てました。次に肚帶をゆるめて、鞍が驢の背に浮く迄そろそろと棒を一本づつ押し立て廻はしました。かうして月の光を頼りに山賊はまんまと、疲れた驢を鞍の下から引つぱり出して、何處へともなく逃げて行きました。しかしサンチョは至つて呑氣なもので、宙に浮いた鞍の上で相變らずグウグウ眠むつてゐます。

やがて夜が明けると、眼の開かない儘にもサンチョは眼を醒まして、ウーンと背伸びしたからたまりません。今迄僅かに支へてゐた四本の棒がバタバ

タと倒れると、地響立てて落つこちました。

『痛！　タタタ……畜生、驢ア何處へ行つちまつただ？』

サンチョは涙を流して山を上下と捜し廻りましたが、驢は何處に逃げたか皆目わかりません。とう〳〵その後數ケ月間といふものは驢の行方は解りませんでした。

此の驢をどんな風にしてサンチョが取り戻したか、又此の山の中でドン・キホーテがどんな眼覺ましい手柄を立てたか、どんな苦行をしたか、といふお話や、お終ひにラ・マンチャ村の牧師さんとお醫者さんとが迎へに來て、ドン・キーホテを馬車にのせて歸ると、彼はその馬車を戰爭だと思ひ込んで大騒ぎするといふお話もありますが、こゝには略します。

五

ドン・キホーテとダルチニア姫との會見。鏡の騎士をうちとつた噺。そのほか。

ドン・キホーテとサンチョとは、とう〳〵又三度目の武者修業に出かける事となりました。村を抜け出す時ドン・キホーテは、騎士の務として、自分の姫君である美くしいダルチニア姫を訪問しなくてはならないと思ひ立つて、馬を姫の故郷トボソの町に向けました。二人がトボソの町に到着した時はもう眞夜中で、一軒として起きてゐる家はありませんでした。ドン・キホーテは町の眞中に立ち止まつて、

『サンチョ、ダルチニア姫の宮殿に案内せい。』

と、命じました。

「宮殿？　一體どんな宮殿だあ。この間迄袋街の小屋に住まつてゐただ。たとへその小屋が宮殿だとしても、此の眞夜中にどうして騎り込んで行かれるもんですかい。」

「まあ來い。宮殿に着けばお前の爲す可き事は余が敎へて遣はさうから。」

とドン・キホーテは案内してもらふ事を斷念して馬を進めました。そして滅法界大きな建物の前迄來ると、

「待てよ。これはと？　うんさうだ、さうだ。これこそ、姫の宮殿に相違ない。」

と云ひ乍ら、馬を大玄關に騎りつけて、ドーアをドンドン叩きました。しかしそれはダルチニア姫の宮殿ではなくつて、此の町の敎會堂だつたのです。

ドン・キホーテとサンチヨとは、それから宛處もなくグルグルと搜がし廻はりましたけれど、宮殿はとう〳〵見つかりませんでした。さうかうしてゐるうちに、夜も白々と明け始めたので、サンチヨはきかぬ氣の騎士を無理にすすめて、郊外の森に一先づ引き上げて休むことにいたしました。

あきらめ兼ねたドン・キホーテは、森に着くや否や色々の傳言をサンチヨに頼んで、又直ぐ姫を搜しに遣りました。

「元氣を出すだ旦那。俺すぐ歸えつて來るだから、氣を落としちやいけねえ。メソメソしてちや、姫君に會ふ事は出來ましねえだ。」

サンチヨは、馬の上でベソをかいてゐる騎士をかう勵げまして置いて、再び驢を驅つて行つて了ひました。

ところがサンチヨは、主人に見へない所迄來ると、涼しい木蔭に驢を騎り

すてて、そこに寢そべつて獨言を云ひながら思案を始めました。

『おいサンチョ君、お前え一體どうしようつてんだい？　王樣のご殿か、お城の中か何つかに住まつてて、世に類もない美人でもらつしやると、旦那が口癖のやうに云ふその姫君を捜がしてどうする氣だね。此のトボソの町を驅けずり廻はつて、ダルチニア姫を捜さうつてのは、乾草の中に落つこちた針を捜がすやうなもんだぜ。旦那あ氣狂えだ。それに違げえねえだ。が待てよ、俺だつてちつとばかり怪しいかな？　類を以て集まるつて諺があるだからな。旦那あ、風車が巨人に見へたり、羊の群が大軍に見へたりする程の大氣狂えだで、さうだ！　誰れでもいい。俺が第一番に出會はす娘さんを連れて行つて、ダルチニア姫でござえますと云やあ旦那はほんとにしべえよ。もしそりや違ふと來りや、大方いつもの魔法つかひが、又しても旦那を困らさうと思つて、姫の容色を化へたんでごわせう、と丸め込んぢまふだ。それがいい、それがいい！』

サンチョはこんな計畫を立てました。さうして、トボソの町迄行つて、ダルチニア姫を捜がして又戻つて來るのに丸一日費やしたのだとドン・キホーテに思はせるために、夕方迄そこに寢てしまひました。

やがて日も暮れて、サンチョが歸らうとして驢にのつた時、運のいい事に向うから三人の田舍娘が驢にのつてやつて來るのです。

サンチョはこれを見て、大急ぎて驅けて歸りました。サンテョの歸つたのを見るとドン・キホーテは、

『おお！　サンチョか、首尾はどうなつた？』

と、待ち兼ねてきゝなしたり。

「上首尾、上首尾、一刻も早く馬に騎つて野原に出てご覽なせえやし。ダルチニア姫が、二人の侍女をお連れになつて此處にお出でござりまするだ。」

「そりや有難たい。サンチョ喜こんでくれ！」

「へい、喜ばないで何といたしますだ。さ、もうぢき見へますだ。綺麗な錦の衣に、ダイヤモンド、ルビイなどキラキラ光る寶石を一ぱい飾りつけて、その上二度と見る事の出來ねえやうな栗毛斑の眞白い惡婆にお騎りなされていらつしやいますだ。」

「何、惡婆？　白馬の事ぢやないのか？」

「お、さうださうだ。惡婆？　白馬？　でもどつちにしたつて同じ事だで。とに角俺アあんな美くしい姫君をこれ迄に一度だつて拜んだ事もありやしねだ。」

ドン・キホーテはサンチョの云ふ事を信じ切つて居ります。

「ではそろそろお迎かえに出かけるとしよう。サンチョ、今日のお禮として次の戰の戰利品の中お前の氣に入つたものをとらせるぞ。それで足りないと云へば、ラ・マンチャの家に飼つてある二匹の小馬を呉れてやる。」

「へい、有難たうございますだ。ぢや小馬の方を戴くとしますべえか。戰利品なんぞどうせろくなものは無えにきまつてるだから。」

二人はこんな話をしながら森を出て行きました。かの三人の田舍娘は眞近かく進んで參りました。ドン・キホーテは馬の上に伸び上がつて、遙かトボソの方を眺めましたが、一向ダルチニア姫らしい者は見へません。たゞ此の田舍娘達が見へるだけなのです。サアもう氣が氣ではありません。たしかに姫は町をお出ましになつたのかとサンチョに尋ねました。

サンチヨは此處だと一生懸命になつて答へました。

「出たも出ないも、一體旦那の眼は何處にくつ付いてるだ。その鼻先きにお日樣のやうにキラキラと輝やいてお出なさる姫君と侍女とが見へましねえのか？」

「姫君なんど余には見えない。やつて來るのは驢にのつた田舍娘ではないか！」

「これはしたり、旦那樣！　あなたにはご自分の姫君が見へましねだか。驢ちやなくつて、雪のやうに白い小馬の足調をそろへてやつてお出なさるあの貴婦人達が！　俺の云ふ事に間違えがあつたら、この髭をグイト引つこ抜いて貰らつても痛くねえだ。」

「余を信じて呉れサンチヨ！　ありや矢張り驢だ。」

「旦那、ちつと眼を拭ふだ。さ、もうそこにお出ましだで、一つ行つて姫君に話しかけてご覽なせえまし。」

サンチヨはこんなにして騎士を欺むきながら、眞近かくやつて來た娘達の前に驅けつけて、驢を飛び降りるや地べたに跪まづいて、譯の解らない事を長たらしくしやべり立てました。信じられぬ儘にも、ドン・キホーテもサンチヨに續いて跪まづいて、サンチヨが、これがダルチニア姫だと云ふ一匹の動物を悲しげな疑がひの眼でもつて、しげしげと見上げました。ヒヨッとすると我が姫君かも知れないと思つたのに、矢張り鼻の低いまつ黒な顏をした田舍のお轉婆娘だつたので、がつかりして了ひました。田舍娘の一人は此の態を見て叫びました。

「そこ退いて下さいよう。急ぎの用事で行くんだから。」

すると、ドン・キホーテは

「サンチョ立て、魔の手は未だに余に付き纏つてゐるんだ。おゝ、いとも美くしき我が姫君よ！　邪険極はまりなき魔法つかひは、私の眼を曇らせ、美くしきあなたのみ姿を破ひ隠くして了ひました。」

と如何にも口惜しさうに云ひました。すると娘はプンプン怒つて、

「ほんとにそこ退いて下さいつてば、このたわけ者！」

と毒吐いて、激げしく驢の横腹を蹴つて三人で駆け去りました。ドン・キホーテは恨めしさうにその後を見送りながら、ため息を吐いて

「あアあ、憎つくい魔法つかひの奴め！　美くしい我がダルチニア姫を、あんな卑しい姿に化へて了ふとは！　美くしい花のやうな、甘い淑やかな香を彼女から取り去つて、あんな厭な香を嗅がせるとは！　正直なところ、サンチョ、姫は鼻のかける程ムンムンする生の玉葱の臭氣を余にプツと吐き掛けて行つてしまつたのだ。」

と云ひますと、サンチョは

「如何にも憎つくき魔法つかひの野郎め。汝の如き奴原は、鯡のやうに目刺しにして燻し殺しても飽き足らねえだ。」

と尤もらしく叫びましたが、内心おかしくつておかしくつて、お腹がキユウキユウ云ひ出したので、物陰に隠れてしまひました。

ドン・キホーテはすつかりしよげ返つて、ロシナンテに騎つて、トボトボと歩き出しました。

その後、主従二人の者が馬を進めてゐますと、いろんな風に假裝した異形

の者が一ぱい乘り込んで、驢に索かせた一臺の馬車に出會はしました。その御者は惡魔の姿、次の男は髑髏と骨でもつて死を意味した服裝をし、その次は弓と矢とを持つた天使キューピッド、それから金の王冠を被むつた王樣や白い鎧を着て兜の代りに羽毛のついた帽子を被むつた騎士等いろいろ居るのです。これを見た二人は膽を潰ぶして了ひました。しかし、ドン・キホーテは流石に、何か腕の鳴るやうな出來事があつたに相違ないと直ぐ感づきました。それで馬車に近づいて行つてききました。

「おい馬車屋！　でなきや惡魔やその他の面面。お前達は何處から來て何處に行くんだ。して又、その中にゐる者は一體皆何者だ。」

すると御者は、丁寧に答へました。

「親方、我々は旅から旅へ渡つて歩く旅役者でさ。「死人の會議」つて芝居

をするためにあの山向うの町に行く途中なんでさ。」

「成程さうか。ぢや行け。だが若し余がその芝居を手助つてよかつたら、どんな役でも一生懸命やるよ。元はこれで仲々芝居をするのが好きだつたものさ。」

彼等がこんな風なうち解け話をしてゐた時、一行の中の、馬鹿に假裝した一人が鈴をガラガラ鳴らしながら躍つて來て、ゴム風船を三つばかり棒の先きに付けたのをロシナンテの鼻先きで揮り廻はしたから、驚くまい事か、ロシナンテはヒヒーンと棒立ちになつてしまひました。不意を喰つた騎士は、齒を喰ひしばつて、あはてて馬を押し靜めようとしましたけれど、どうする事も出來ず、その儘馬は眞つしぐらに廣い野原を驅け出しました。

サンチョは、スワ一大事と驢を飛び降りて主人を救けに走つて行きました

が、未だ追つかない先にロシナンテはズデンドーとぶつ倒ふれて、同時に騎士はもんどり打つて跳ね飛ばされました。

この騷ぎの最中あの馬鹿は、今度はサンチョの驢にゞび騎つて風船玉で頭や胴を捺で廻はしましたから、驢も仰天して驅け出しました。

これを遠くから見て居つたサンチョは、主人を救ひに行かうか、自分の驢を追つかけようか、ごつちにも行き兼ねて、おどおどし乍らそこに立ち縮みました。しばらくしてから、漸やく意を決して主人の所に驅けつけて、主人を馬に乘つけてやりました。

「まアまア旦那、悪魔めは俺の驢にのつて逃げちまつただ。」

「悪魔が？　どんな悪魔が。」

「あの風船玉持つた悪魔の野郎だ。」

「心配するな。余が直ぐに卑怯者を引き戻してやらうから。續けサンチヨ！あの馬車を占領して、驢のかはりに騾をとつてやる。」

ドン・キホーテは息巻きました。やがて、今迄野原を驅けてゐた驢も倒れてしまつて、それに騎つかつてゐた馬鹿が、町の方に逃げて行くのを見たサンチヨは、

「うんにや旦那、まあさう急がねえ方がええだ。どうやら悪魔めも驢から降りて逃げて行くやうだぞ。」

と早り立つ騎士を押し靜めようとしましたが、騎士は

「止めるなツ、かくも悔辱を受けて、何で默つてゐられるか！」

とサンチヨの止めるのも聞かばこそ、その馬車めがけて

「おーい！　その馬車しばらく待つた。他人に對する禮儀を敎へて呉れよう——。」

と叫び乍ら槍を振り振り突喚して行きました。これは唯事ではないと見た役者連中は、バラバラと馬車から飛び降りて、手ん手に大石を拾ろつてキッと身構まへました。サンチヨは漸やく追ついて來て、そこに戰略をめぐらしてゐる騎士を、

「血迷つたか旦那！　思ひ止まるだ。どうせ奴等は唯の旅役者ぢやねえか。騎士の一人でもゐればとも角、な、思ひ止まりねえ。」

と諫めました。すると此の諫者は見事に効きました。ドン・キホーテは、なアる程と大きくうなづいて、

「うん。如何にも汝の云ふ通りぢや。よく云つて呉れた。旅役者輩に向つて我が劍を抜くんぢやなかつたわい。サンチヨ、今度は汝の番ぢや。恨みがあ

れば彼等と一戰するがいい。余は此處にゐて戰略を與へて遣はさう。」

と云ひました。サンチョは戰爭しろと云はれて當惑して了ひました。

「へい、もう戰は澤山で……。ほんとうのキリスト敎信者は、その敵をもゆるさなくちやなんねえだ。俺は絕對平和主義者でな。それに驢も格別傷も負はなかつたらしいだで、此の上恨みと云つて、ちつともありましねだ。」

「汝がさう思ふならそれでもよからう。善かツ、愼重にして用心深きサンチョよ、さらば我等は再び出掛けるとしよう。」

ドン・キホーテはサンチョを捉がしました。二人はそこから引き返へして、又馬を進めて行きました。

その夜二人はとある大木の根もとに泊ることになりました。サンチョはコルクの木の下に眠むり、ドン・キホーテは樫の木の下に横たはりましたが、

しばらくするとドン・キホーテは、ガヤガヤ言ふ人の聲に醒まされました。こんな所に、しかも眞夜中人が來るとはおかしいと、四邊をすかして見廻はすと、直ぐ近くに何者か馬に騎つた二人の者がゐるのです。その一人が馬から降りると、ガチャガチャと鎧の音がしました。こりや武者修業の騎士に相違ない。油斷はならないと、そつとサンチョの寢てゐる所に忍び寄つて彼を搖り起して、耳に口をあてて囁やきました。

「サンチョ、油斷はならぬ。大變な事があるぞ。」

「へえ？　天のめぐみ、どこにあるだ。」

「何處つて一寸後向いて見ろ、武者修業が休んでゐるんだ。」

「……ほんとだ？　しかし、どうして奴等をやつ付けるだ？。」

「少なくとも……おや？　ギターを彈き出した……歌ふんだな。」

二人は息を殺して、見知らぬ騎士が、その姫君に捧げた愛の唄を歌ひ、姫君の冷酷を嘆げくのを聞いて居りました。

「我が姫君よ。ナバレ、レオン、カスチリアの騎士達は申す迄もなく、遠くラ、マンチヤの騎士達に至る迄、あなたが世にも類ひなき美姫に在す事を誓はしめたこの私に、何の御不満がおありです……」

悩ましげな、見知らぬ騎士の言葉を聞いてゐたドン・キホーテはその中の一句にカッと怒つてサンチョに云ひました。

「いやそんな筈はない。余はそのラ、マンチヤの住人ぢや。然るに余はそんな事を誓つた覚えは更にない。今からだつて誓ふものか。あの騎士は氣狂ひに違ひない。だがも少し聞いてやれ、どんな事を云ふか。」

見知らぬ騎士は、敏くも二人の話聲を聞きつけて、

「何者だッ、一體そこにゐるのは？」

と荒々しく呶鳴りました。ドン・キホーテは覺られたなと靜かにその方に近づいて行つて、丁寧に挨拶いたしました。さうして間もなく二人の騎士は猶々しく話し始めました。サンチョも向うの從者の方に近づいて行つて、騎士達とは少し距たつた木の下に座はつていろんな話を始めました。しばらくすると從者は、

「どうも舌が硬はばつて話が出來ませんね。私がいゝ藥を鞍にぶら下げて持つてますから少々お待ちなさい。」

と云つて、葡萄酒の入つた大きな皮製の壺と、素敵に大きなパイとを抱へて戻りました。するとサンチョは、すゝめられもしない前から、もうそのパイを引たくつてムシヤムシヤ喰べ始めました。喰べながらも、從者がこんな

御馳走を持つてゐるのを不審に思つて尋ねなした。

「こりや皆お前えさまが持つて來たのかい？お前えさんも唯の從者ぢやねえか。俺の行囊の中には、何時だつて胡桃が二ツ三ツと、巨人の頭でも叩き割られさうな、カチカチになつたチーズ位しかあつた事はねえだ。俺の旦那は、武者修業と云やあ、乾した木の實かサラド位しか喰つちやいけねえと思つてるだから、實際やり切れねえや。」

「ご尤も、ご尤も。私の主人なんざ氣儘に飲んだり食つたりしますからな。有る時には我々も遠慮なしやらうぢやありませんか。」

從者は酒壺はサンチヨに渡しながら陽氣に云ひました。サンチヨは、壺を口にあて丶、空一ぱいに美くしく輝やいてゐる星が見へる程仰向いて、息の續くかぎりグートとやりなした。

「あゝうめえなア。」

こんな風に鱈腹飲んだり喰つたりして、二人は仲良く枕を並べて前後も知らずに寢てしまひました。

從者達がかうしてゐる中に、二人の騎士はいろ〳〵と戰の話に花を咲かせてゐましたが、かの見知らぬ騎士は、そろ〳〵自慢話を始めて、數々の騎士を打ちとつた中でも、ラ・マンチャの住人ドン・キホーテと云ふ强たか者を打ちとつたのが最もの大手柄だつたと云ひました。この話をきいたドン・キホーテは驚ろきかつ烈火の如くに憤はつて、荒々しく詰め寄りました。

「やいや騎士殿！　貴殿がスペイン中の騎士を打ちとつたと申さるゝ事に異議をさし挿む者ではないが、唯ラ・マンチャの住人ドン・キホーテを打ちとつたなんど丶再び申さるゝな。それは多分人違がひでござらう程に。」

「いや、確かにそれは、サンチョ・パンザと申す従者を連れたドン・キホーテその人に相違ござらぬ。この上お疑がい召さるゝならば、劍にかけても信じさせるでござらう。」

「いやその儀には及びませぬ。拙者は我が最善の友としてドン・キホーテなる騎士をよつく承知仕つてゐる。貴殿の打ちとつたと申さるゝドン・キホーテなる騎士は、恐らくは魔法つかひの手にかゝつた替玉でござらう。それでも尚得心ないとすれば、一々證明仕らう。よつく聞き給へ、拙者こそはラ・マンチヤの住人ドン・キホーテと申す騎士でござるぞッ。」

ドン・キホーテは斯う云ひながらバッと跳ね起きて、劍の柬に手をかけました。しかし相手の騎士は寢た儘、至極冷靜に

「拙者は魔法にかゝつたドン・キホーテにしろ、唯人のドン・キホーテにしろ、決して怖れる者ではござらぬ。だが、かゝる暗黑の中では戰は出來兼ぬるによつて、明朝を待つと致さうではござらぬか。いかゝでござる？」

と云ひました。ドン・キホーテも、尤もだと思ひましたので、

「如何にも承知仕まつゝた。」

と明朝を約しました。二人の騎士は明朝日の出頃に戰かふ約束をして、その準備をするために、グウグウ寢てゐる從者を搖り起こしました。サンチョは戰と聞いてビックリしましたが、仕方なく澁々と敵の從者と共に馬を連れに行きました。すると敵の從者はサンチョに向かつて喧嘩を吹つかけて來ました。

「おい君、主人同志で喧嘩しようつてのに、俺達も唯默まつて見てゐられまいせ。友人の戰かつてるのをぽかんと傍で見てるつて事は、俺達の國アンダ

ルシャの禮儀ぢやないよ。」

しかしサンチョは、キツパリと跳ねつけました。

「そりやお前の國の法かも知んねえが、そんな事は悪漢のする事だ。俺は今迄そんな事聞いた事も無えだ。それに劍も槍も何にも持つてゐねえ俺に、どうして戰なんぞ出來るけえ。」

「いや武器の事なら心配御無用だ。俺が袋を二つ持つてるから、そいつでなぐりつこするんだ。」

「袋でか？　袋ならよからう。埃でジヤケツはちよつとばかり汚れるかも知んねえが、身體に障りつこ無しだからいゝや。大いにやるべえ。」

「しかし空つぽの袋ぢや面白くない。手頃の石を六つゞゝ入れて、そいつでやらう。」

袋に石を入れると聞いて、サンチョはすつかり怖け付いて了ひました。

「何アんでえ。石の代りに軟らけえ絹を詰めたつて俺は厭だ。厭だとも、旦那達は勝手にやるがえゝだ。俺の知つた事けえ。」

「駄目だ。何と云つても三十分やそこらやるんだぞ、いゝかい？」

「一分間だつて俺は厭だ。俺は何もお前えを怒つてやしねえだ。喧嘩なんぞしたくねえだ。考へても見ねえ、怒らぬえで喧嘩が出來るけえ。」

「そんな事云つてると、俺はお前に飛び掛かつて行つて、ポカリポカリと頬つべた張り飛ばすぞ！　それでも怒らないと云ふのか？」

「何アに云つてやがるんでえ。俺にだつてそれ位の智慧はあらあ。お前えにやられたゞけは、俺だつて仕返へしゝべえよ。俺の此の鼻の柱に誰が觸る事が出來るけえ。そんな事する奴アお前だつて、誰だつて、棒でガンとやつゝ

けてやらあ。俺がほんとに怒つてみろ、恐ろしいぞ。」

「よしッ、ぢやその元氣で明朝一と戰しようぜ。」

二人の從者達もかうして戰の約束をして了ひました。

やがて夜は白々と明け渡りました。夜が明けると共に、先づ第一にサンチヨの眼についたものは、かの從者の鼻だつたのです。その筈、その鼻といふのは、頗る大きくつて、遙か口の下の方迄ブランとぶらさがつてゐて、その上トマトのやうに眞赤で、お負けに鼻の頭は疣で被はれてゐて、鼻全體が片つ方にひん曲がつてゐると云ふ代物なのです。

サンチヨは慄え上がつて了ひました。さうしてこんな奴にかゝつては、喧嘩しない前にもう參ゐつてしまふと思ひました。

こちらはドン・キホーテです。戰の相手はどんな男かと思つて、相手の顏をしげ〳〵とのぞき込んで見ましたけれど、兜が固く顏を被つてゐるので一寸も見えません。が、所々に半月形の小さな鏡を付けた錦の上衣を鎧の上から羽織つた格好など、實に剛氣なものです。兜には綠や黃や白の羽毛を飾つてあつて、槍はと見れば、その先きには大形のピカ〳〵した穗がついてゐるのです。その上騎士の身體は、グワッシリとして如何にも強さうです。しかしドン・キホーテはサンチヨと違つて敵にはビクともいたしません。

「やいや騎士殿、戰の前にその兜をとつて一應顏をお示しなさるのが作法でござらう。」

と云ひますと、鏡の騎士はおもむろに答へました。

「貴殿が勝つにしろ負けるにしろ、戰の後とつくと拙者の顏を見られる時間はある筈。」

「しからばその儀はそれとして、貴殿の打ちとつたと申さるるドン・キホーテの顔と、このドン・キホーテの顔とは同じでござるか。」

「されば、さながら瓜二つとでも申さうか。」

「よしッ、此のドン・キホーテが、そのドン・キホーテに非ざる事を證明仕まつらう。勝負！」

と、大聲に叫びました。

二人の騎士は、各々馬にうち跨がつて、立ち働らくだけの陣地を取る爲めにサット双方に別かれました。そのとたんに、あの偉大なる赤鼻が初めてフとドン・キホーテの眼に止まつたのです。流石の騎士もこれを見てギヨッとしました。今迄鼻にばかり氣を奪はれてゐたサンチヨは、主人の行くのを見るともう鼻を見てゐるどころでなく、手綱をとつて主人のあとを追つかけて行きました。

「旦那、敵にぶつかる前に、よく神様を念ずるだよ。それから、俺はこのコルクの木の上からよく戰を見物するつもりだで、ちよつくら押し上げて呉んねえ。」

「嘘つけ！　怖いから木に上がりたいんだらう。」

「へえその、全くのところ、あの鼻がちつとばかり氣になるんで。」

「さうだらう。余はあんなものの位何でもないが、大抵の者が怖はがる筈だ。さ、上がれ、押し上げてやるぞ。」

ドン・キホーテが、まだバタ〳〵するサンチヨのお尻を押して木に上がらせようと骨折つてゐる間に、鏡の騎士はトツ〳〵と自分のいゝと思ふだけ馬

を驅つて行つて、ドン・キホーテも自分と同じ事をしてゐるものだとばかり思つて、クルリと馬の頭を引つくり返へして、全速力で驅け戻りました。全速力と云ふと大變速いやうに聞こへますけれど、この騎士の馬はロシナンテよりも、もつともつと耄ぼれてゐたので、そんなに速くは驅けられません。野原を途中迄驅けて戻ると、相手のドン・キホーテがまだ木の下で何だかグズ〳〵してゐるので、俄かに馬を止めました。

ドン・キホーテは、背後に敵が全速力で近づくのを覺つたので、力一杯にロシナンテの胴腹に拍車をあてました。するとロシナンテは今迄になく物凄ごい勢で驅け出しました。パッパッパッと丸で火の出るやうな激げしい拍車を續けざまにあてゝ、鏡の騎士の所迄來ると、その儘猛然と敵にぶつかつて了ひました。

不意を喰つた鏡の騎士は、ひどく地べたに叩きつけられて、聲も立てずその儘動かなくなりました。ドン・キホーテは馬から降りて、敵が死んだかを見定める爲めに兜を脱ぎにかゝりました。木の上からこれをみてゐたサンチョも木から滑り降りて飛んで來ました。倒れた騎士の兜を脱いで、その顏を一目見た時のドン・キホーテの驚ろきと云つたら！

驚ろくも道理、此の騎士こそは、ラ・マンチャの彼の友人サムソン・カラスコだつたのですもの。

「サンチヨ！　又もや魔法つかひにしてやられたぞ、無念だッ！」

ドン・キホーテが驚ろきの餘りかう叫ぶと、サンチヨはガタ〳〵慄えながら近寄つて來て、

「旦那、悪い事は云ひましねえ。このサムソン・カラスコに似た奴の止めを

刺してしまふだ。そしたらあの魔法つかひもちつとは弱つて、これから悪い事もしなくなるだから。」

と主人を促がしました。ドン・キホーテも意を決して、

「それはいゝ思ひつきだ。」

と、將に敵の喉を刺さうとした時、

「ドン・キホーテ殿、しばらく待つた！　それは貴殿の友人サムソン・カラスコに相違ございません。して私はその從者でございます。」

と、かの鼻の從者が横合から飛び出して來ました。ところが見ると何時の間にか、あの偉大な赤鼻が無くなつて、普通の鼻に變はつてゐるのです。第一にそれに眼をつけたサンチョは、

「だが鼻は何處へ行つただ。あの大かい赤鼻は？」

と、叫びました。すると從者は、漆塗りの紙製の鼻をポケットから取り出して答へました。

「鼻か、鼻はこのポケットに入れといたのさ。」

サンチョは從者の顏をじツと見つめてゐましたが、突然頓狂な大聲で叫びました。

「うえツ、お前え友達のトーマス・セチアルめぢやねえか？」

「いかにもトーマス・セチアルだよ。サンチョ君、皆君の旦那を嚇かすための策さ。おい俺の旦那を殺さないやうに賴んで呉んろよ。」

鼻の從者は笑ひながら云ひました。鏡の騎士は漸やくこの時正氣に復りました。ドン・キホーテは敵の上に馬騎りになつたまゝ咽喉に劍を擬して迫りました。

「さあ白狀するか。トボソなるダルチニア姫は世界に類のない美姫であつて、貴樣の打ちとつたと云ふドン・キホーテでなかつた事を！」

「一々白狀仕まつる。」

組み敷れた騎士がかう白狀しても、ドン・キホーテは重ねて肉迫しました。

「まだいかん！　貴樣はサムソン・カラスコらしく見せかけても、實は余の仇敵なる魔法つかひの魔法にかゝつた替玉に違ひあるまい。どうだ？」

こんなにして慘々いぢめた上、彼は敵をゆるしてやりました。鏡の騎士サムソン・カラスコは、從者と共に逃げて行きましたが、物蔭迄來ると、今に見ろきつと仇を返へしてやるからと口惜しさうに云ひました。あとに殘つた二人は、矢張りこれは魔法つかひの惡戲だと固く信じて居りました。

六

ドン・キホーテとライオンとの格鬪。黑ん坊の征服。

ドン・キホーテとサンチヨとは、鏡の騎士に打ち勝つたといふので有頂天になつて武者修業を續ける事になりました。サンチヨは、あの鏡の騎士サムソン・カラスコは、魔法にかゝつた替玉だと、ドン・キホーテの云ふのをそのまゝ信じてゐるやうに見せかけました。でないと、前に田舍娘と魔法つかひとを種になんまと主人を欺むいた事が發覺してしまふ恐れがあつたからです。

二人が話をしながら進んで行くと、後から綠の服を着て立派な牝馬に跨がつた一人の紳士が追つ付いて參りました。紳士は通りすがりにジツとドン・キホーテを凝視めてゐましたが、氣輕るな人と見へて、騎士だと見ると直ぐ

話しかけて來ました。二人は打ち解けて武者修業の話を始めました。ドン・キホーテは勿論こんな話は好きで耐らないのですが、その紳士も劣らず好きと見えて、だん〳〵と話に實が入つて何時終るか解らない位になつて來ました。お蔭さまでサンチョは此の暇に、近くの羊飼ひの家に驢を驅つて、乳を買いに行く事が出來ました。サンチョが主人の傍を離れて乳屋に這入つた時向うの方から黄と赤と二タ色の小さな旗を立てた、何だか變な一臺の馬車が近づいて來ました。ドン・キホーテはこの馬車を見ると、何事か起つたなと一人うなづいて、

『サンチョ、兜だ。』

と叫びました。サンチョは此の時丁度乳を買ふところでしたが、主人の叫び聲を聞くと、乳屋が乳を器に注れて呉れるのが待ち遠しく、それかと云つて、お錢は拂つてあるのでその儘行かれもせず、一寸ドギマギしましたが、持つてゐた主人の眞鍮の皿兜に氣が付くと、これだとその中にドッと乳をあけて、何事が起つたのかと大急ぎで戻つて來ました。

『おい早く兜をよこせ！　油斷はならぬ。變なものがやつて來るぞッ』

ドン・キホーテの云ふ事を聞いた綠服の紳士は、四方をキョロキョロ見廻しましたが、唯變な馬車が一臺やつて來るのみで格別騷ぎ立てる程のものは何も見へません。その馬車にはスペイン王の旗が立てゝあるので、王樣の寶物車に違ひないと思つて、その事をドン・キホーテに告げました。しかしドン・キホーテは凛然と、

『拙者の敵は何時何處から、どんな格好をして飛び出して來るか解らないので決して油斷はならぬ。おいサンチョ、兜だッ。』

と云つて、サンチョが何時迄も兜を大事さうに持つてグズグズしてゐるものですから、行きなりそれを引たくつて、改めもしずにその儘被むつたものですからたまりません。頭から顔から胸から背から、ビッショリ乳だらけになつて了ひました。

『ウワッ！　サンチョこりや何だ？　余の頭が溶けたのか？　冷汗か？　怖ろしくつて出た冷汗ぢやないぞッ。一大事が近づいて來る。早く手拭を貸して呉れ、眼が見へぬ。』

ボンヤリと此の乳人形を見てゐたサンチョは、手拭を貸せと云はれて、自分の腰から汚れくさつた手拭を取つて差し出しました。

ドン・キホーテはそれで乳を押し拭つて、一體この冷たいヌラヌラした白いものは何だらうと、兜を脱いで見ました。さうして、

『おやッ？　この白いものは一體なアんだ？』

と乳を指先きに付けて、フンフン嗅でゐましたが、顔色が變ると見るまに、

『この野郎ッ！乳なんか入れやがつてどうするか見ろッ』

と、サンチョを呶鳴りつけました。

『乳？　俺は乳なんぞちつとも知りましねえだ。大方又、惡魔の仕業でごわせう。どうして俺が兜なんぞ汚すもんけえ。どうもそりや魔法つかひの奴に違えねえだ。考へても見なせえ。俺何處で乳買つただ？　乳買つたら俺は兜なんぞに入れるより前に飲んぢまふだ。』

サンチョは又魔法つかひにして了ひました。ドン・キホーテは再び兜を被むつて、

『いや解つた。何か這入つてゐた事は確かだが、もうよし――さあ來い！

何者にても相手にしてやる。』

と、もうすつかり馬車の方に氣をとられて大聲に呼ばはりました。

二匹の騾に索かれて、御者の他にも一人箱の上に人を乘せた馬車は、靜々と近づいて參りました。ドン・キホーテは、さあ事だとその馬車に向つて云ひました。

『やいその馬車、一體何處へ行く。その旗は何の爲めの旗ぢや？』

すると御者は叮嚀に、

『へい、これは手前の馬車で、この箱の中には王樣への贈物のライオンが這入つて居りますんで。旗はこのライオンが王樣のものだと云ふ事を人々に知らせる爲のものでございます。』

と答へました。ライオンと聞いてドン・キホーテは叫びました。

『ライオンだと？　大きな奴か。』

『ハイ、手前は今迄澤山のライオンを賣買いたしましたが、こんな太つかい奴は初めて見る程、全く珍らしい代物なのです。さ、少し退いて下さい。手前共は急いで居ります。ライオンも食事時が過ぎたので、飢へて居りますので、近寄ると危なうございますから。』

箱の上のライオン商人が斯う注意しますと、ドン・キホーテは侮られたと思つて怒つて、

『何だと？　ライオンが余を食ふと申すか。降りて檻を開けい！　ライオンなんぞにビクつく余ちやない。百の魔法つかひが余を苦しめやうと計つて、かゝる猛獸を持つて來やうとも驚ろかぬわい。さあライオン！　ラ・

マンチヤの住人ドン・キホーテの腕前を見ろッ。』

と馬の上に立ち上がりました。サンチョはこの乱暴な主人の言葉を聞くと青くなつてかの紳士の所に驅けつけました。

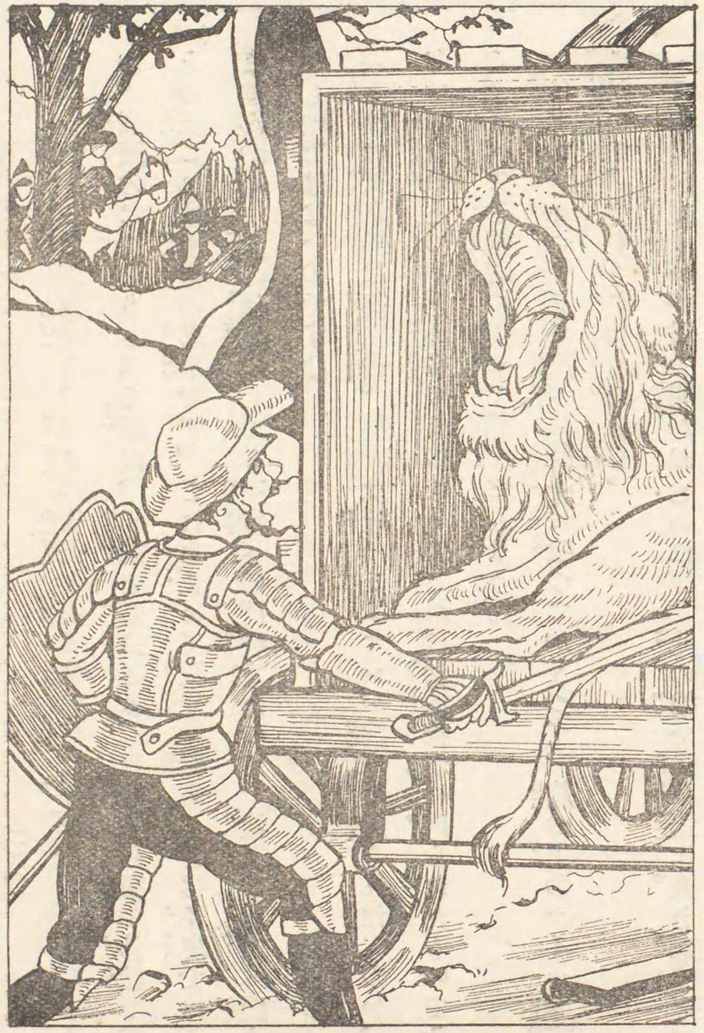
『旦那様、どうか俺の旦那を止めて下さりませ。ライオンと喧嘩した日には俺達迄八ツ裂きになつちまふだからう。』

『何、ライオンと喧嘩する？　お前の御主人は氣狂ぢやのう。』

『うんにや、氣狂えちやありましねえだが、唯どうも向う見ずで俺はほんとに困つちまふだ。』

『さうか。では行つて忠告してやらう。』

紳士は今にも檻を開けさせようとしてゐるドン・キホーテの所に驅けつけて、キツと云ひきかせました。



『騎士殿！　武者修業も、他人の安全を計る事の外に手を出してはなりません。貴殿のなさらうとする事は、勇敢と云ふより、むしろ狂氣の沙汰です。その上これは王様の馬車です。これを止めて乱暴を働らくとは不忠ではありませんか！　此の猛獣にしても王様への贈物であつて、決して貴殿へ贈られたものではないのです。』

『それは又意外な御忠告。拙者は此のライオンが拙者に贈られたものか、でないか位はとつくと心得てるつもり。これは勿論拙者に贈られたものでござる。すべてを拙者に委せて戴くとしよう。』

とドン・キホーテは反對に紳士に喰つてかゝつて、箱の上のライオン商人に向つて、ますます執念深かく、

『さあ檻を開くか。檻を開かぬとあれば、此の槍で汝を箱に突き刺すぞッ。』

と迫りました。すると今迄黙つてゐた御者は慄えながらドン・キホーテに願ひました。

『どうかライオンを出す前に、この騾だけ連れて逃がして下さい。騾と馬車とは私の財産で、これがなかつたら私は破産しちやうんですから。』

『よろしい。何處にでも早く連れて行け。早く。』

御者が飛び降りて大急ぎで騾を解きにかゝつた時、ライオン商人は大聲で

『皆様御注意！　私は好んでライオンを出すんぢやないから、譬ひどんな事が起つても、責任はこの騎士殿にあるんですぞ。さあ退いた退いた。』

と叫びました。

綠服の紳士は、もう一度ドン・キホーテに注意いたしましたけれども、ドン・キホーテは、

『總ては描者の胸の中にござる。怖ろしくつてライオンとの鬪を見る事が厭なら安全な所に避難されたらようござらう。』

と、一向平氣です。サンチヨは驅けつけて來て、涙を流して、どうかそんな無茶を止すやうにと繰り返へし忠告しましたけれど、ドン・キホーテはどうしても聞き入れないで、

『サンチヨ、余の修業の邪魔しては困る。何處かに隱れてろ。若しも余がライオンの爲に殺された時は、それ何時も云ひ聞かせてあるやうに、ダルチニア姫の所に行つて、余の最後の模樣を告げよ。』

と、最後の決心を示しました。かの紳士ももうこれ迄と、遙か向ふの丘の崖の上に避難しようと思つて騾を連れて急ぐ御者の後を追ひました。サンチヨは、主人がきつと殺されるだらうと思つて大聲に泣いじやくりながら、騾の横腹をポンポン蹴つて、皆のあとについて一生懸命に驅けて行きました。

ドン・キホーテは、馬上で鬪かつたものか、徒歩で戰かつたものかと思案して居りましたが、どうもロシナンテがライオンに向かふと怖ろしがつていけないだらうと思つて、徒歩で鬪かふ事に決めました。

ライオン商人は、も一度忠告してみましたが、ドン・キホーテが頑として聞き入れないので、止むを得ず、思ひ切つて檻の戸をギーツと開け放つて、素敏こく隱れてしまひました。

ドン・キホーテはスラリと劍を引き拔いて、楯を構へてヂリヂリと檻に迫りました。

急に檻の戸が開かれて、その前に一人の騎士の身構へてゐるのを見たライオンは、その大きな前足をグット突き出して、うす氣味の悪い眞赤な口をク

ワッと開いて、人の腕の長さ程もある舌でペロッと口の周圍を舐め廻しました。さうして、ムックリ起きあがつて、檻の外に頭を突き出して、燃える石炭のやうな二つの凄い眼でその邊をねめ廻しました。誰でもこれを見ては慄え上がるにきまつてゐますが、ドン・キホーテはそこにつゝ立つた儘、ライオンの飛びかゝつて來るのを今か今かと待ち受けて居ります。ところが、始めのうちは今にもドン・キホーテに飛びかゝりさうに見へたライオンは、その大きな黄色い眼をギヨロッと一瞬間騎士に向けただけで、のそのそと向ふむきになつたかと思ふと、大きな欠伸を一つしてその儘ドッカリと横になつて了ひました。

ドン・キホーテは案外にもライオンが飛び出して來ないので拍子抜けがして、何處かに隱れてゐるライオン商人に向つて、

「おい、こいつを引摺り出せ。引つ叩たいてみろ！」

と、叫びました。ライオン商人は箱の蔭から、

『滅相もない！それこそ八ツ裂きにされますぞ。親方、お願ひです。今日はもうこれで止して下さいな。親方の勇氣はよつく解りました。親方でなくつて、誰にこんな事が出來ませう。ライオンが飛び出して來なかつたのは、親方の勝つた何よりの證據です。』

と、云ひました。ドン・キホーテはこれを聞いて大得意で、

『如何にも左樣だ。では檻を閉めろ。さうして、余がライオンを打ち取つたと云ふ立派な證明書をもらふとしよう。如何にして檻が開かれたか。如何にして余がライオンの飛び出して來るのを待ち受けたか。さうして如何にしてライオンが尻尾を卷いて余に降參したかを詳細に書き記して呉れい。余は劍

を收めるとしよう。』

と云つて、さき程サンチョから借りて乳を拭つた手拭を槍の穗先きに結びつけて、避難してゐる人々に戻つて來いとそれを振つて合圖いたしました。

サンチョは丘の上で此の信號を見ると叫んで云ひました。

『若し俺の旦那がライオンを殺す事が出來なかつたら、俺ア首でも縊るだ。』

崖の上に避難してゐた一同の者が、バラバラと馬車の所迄驅け戻つて來ると、ライオン商人は戰の模樣を詳しく話して聞かせました。そしてお終ひに、彼が王樣の所に行つたら、早速この勇敢なる騎士の話を申し上げるつもりだと付け加へて云ひました。すするとドン・キホーテは、得意の鼻をヒクヒクさせて、

『若し王樣が、その勇敢なる騎士は誰だと御下問あつた時は、それはライオン騎士でござると申し上げて呉れい。余は今後自分を、ライオン騎士と呼ぶ事にしよう。』

と、云ひました。

サンチョとドン・キホーテは、それから綠服の紳士の招待を受けてその家に伴はれ、數日の間滯在する事になりました。その間に、ある時は結婚式に招かれ、又或る時は祝宴にのぞみ、その他非常に歡待されて、サンチョは勿論ドン・キホーテも大滿足をいたしました。

さて二人は數日の後紳士の家を辭して、再び旅に出ましたが、ある夕方の事、宿に就いて後ドン・キホーテが戶外で食事の時間を待つて居りますと、向ふから羚羊の皮服を着て、左の眼から顏の一部にかけて顏飾をした一人の

男がやつてまゐりました。その男は宿屋の玄關に立つと、奥の方に向いて、

『亭主！　宿は出來るかい？　ト猿と』メリセンドラ救助』の人形芝居の一座がやつて來たぞ。』

と、嗾鳴りました。すると亭主はあたふたと出て來てその男に挨拶いたしました。

『おやピーターの親方でございますか。これはようこそ。お蔭さまで面白い夜が過されますんで、皆さぞ喜ぶ事でございませうて。時に猿はどこに？』

『今やつて來る。俺は一足先きに宿の都合を聞きにやつて來たんだ。』

『お宿と、そいつあ少し困りましたな。實はアルバ公爵樣がお泊りなので、どの部屋もすつかり閉がつて居りますんで。まことに御氣の毒樣です。しかし猿と芝居とは是非今晩持つていらつしやい。金放れのいいお客がどつさう泊つてゐますからな。』

『さうか、そりや有難たい。』

ピーターは直ぐ馬車を置いてある方に引つ返へして行きました。ドン・キホーテは亭主に尋ねました。

『ピーターつてありや一體何者だ。』

『あの男でございますか。あれは、メリセンドラとドン・ガイフエロスとの面白い人形芝居を持つてこの田舍を前々から巡業してゐる興業師で、人形芝居の外に、世界一のかしこい猿を連れてるんです。その猿と云ふのは、こつちから何か尋ねるとピーターの肩の上にピヨコンと乘つて、主人の耳に口をあてて何事か囁やくんです。その猿の云つた事をピーターが皆樣に通譯して答へる、と斯ういふ工合なんです。百發百中と迄は行きませんが、でも仲々

見事なものです。時には悪魔でもついてやしないかと思はれる程不思議に的中するんです。』

二人がこんな話をしてゐると、ピーターはその下猿を連れて戻つてまゐりました。ドン・キホーテは直様猿の所に行つて何か尋ねますとピーターは

「あ、そりや駄目です。猿に未來の事なんざ解りつこありませんや。もう過ぎ去つた事でなくちや。』

と、注意しました。傍で見てゐたサンチョは、突然口を出して、

「過ぎ去つた事なんぞ云つたつて一錢も呉れてやるもんけえ。過ぎ去つた事あ、俺自身が一番よく知つてるだ。それよりか、俺の家内のテレザが今何してるだか見てくんねえ。」

と、云ひました。ピーターがポンと肩を叩くと、猿はそこに飛び乗つて主人の耳に口をあてて、しばらく普通の猿の聲と同じ聲でキツキツと何事か云つてゐましたが、やがてポイと降りました。するとピーターは突然ドン・キホーテの前に跪まづいて、

『これはこれは、武勳比びなき武者修業の復興者、弱き者の護り、不幸なる者の慰めなるラ・マンチャの住人騎士ドン・キホーテ殿でございましたか。』

と、うや〳〵しく云ひました。ドン・キホーテは見事圖星を指されて非常に驚ろき、かつ怪しみました。その筈、この宿屋には未だ彼の名を知つた者はゐない筈だと思つて居りましたから。しかし彼はピーターが大山師であつて、猿に何か云はせる前に先づ自分で誰か見物人の素性を捜り出して、人々

に向つて、

『世界一の騎士殿の唯一の従者サンチョ・パンザ殿。貴下の奥方は健在で唯今リンネルの衣を召して、左手には飲み口の缺けた葡萄酒の瓶を持つて、これから一杯おやりにならうと云ふ所です。』

と云ひますと、サンチョは、

『なある程な。さうでもあらう。』

と、大いに感心しました。しかしドン・キホーテは、

『如何にもこの不思議な猿の云つた通り拙者は、ラ・マンチヤの住人ドン・キホーテには相違ないが、此の猿が神通力を持つてゐるかどうかは、猿の云つた事を實地に見た上でなくては信ずる譯に行かぬわい。』

と、云つて、そこに感心し切つてゐるサンチョを傍に呼んで、實際猿がこ

んな事を云ふのかどうか怪しいものだから、欺まされないやうにと注意してやりました。

二人が立ち話をしてゐると、人形つかひのピーターが、もう芝居が始まるからと誘ひに來ました。それで、皆連れ立つて蠟燭の灯の華やかに輝やいてゐる廣い部屋に這入つて行きました。芝居が始まると、ピーターは人形を使ふ爲に幕の中に隱れ、一人の少年が前に立つて臺題の說明を始めました。

芝居と云ふのは、ドン・ガイフエロスと云ふ男が、サラゴツサの町の城の中に黑ん坊の爲に囚はれてゐる彼の妻メリセンドラを救ひ出すといふ、血湧き肉躍る冒險大活劇で、メリセンドラが城廓の中に囚はれてゐるところから始まるのです。

何とかして自分の妻を救ひ出さなければならないと、種々捜索の歩を進めてゐたドン・ガイフエロスが、或る日の事計からずも黑ん坊の城のバルコニーに妻の姿を發見する。ドン・ガイフエロスは大いに喜んで、兼ねて用意の長い綱をバルコニーに投げ掛けて妻を救ひ出して、一匹の馬に二人が騎つて此の場を逃れやうとする。すると、メリセンドラの逃亡は直ちに城中に知れ渡つて、ガランガランと非常鈴が亂打される。怒り狂つた黑ん坊は、蜂の巢をつゝいたやうに城内から崩れ出てドンドン追跡を始める。あはや二人の命は風前の灯と見えたその時、さき程から手に汗を握つて夢中になつて見物してゐたドン・キホーテは、もう耐りかねて、

「やあやあその惡人共！　ドン・ガイフエロスの如き正義の騎士を追跡するとは怪ツしからぬ。余が汝等の相手してやる。待つた、〳〵、待アッたわ！」

と、劍を拔いて一飛びに舞臺に飛び上がり、黑ん坊の中に躍り込んで、ドン

チャンバラと斬り捲り叩き潰し、殘る敵を隅の方にポンポン蹴込んで了ひました。もし人形つかひのピーターが、舞臺の下に潜ぐり込まなかつたら彼の首もチヨン斬られたかも知れなかつたのです。ピーターは膽を潰して『止した！　止した！　これはほんとの黒ん坊ぢやない。これを壞はされた ら商賣止まりだア。』

と、床下から叫びました。けれどもドン・キホーテはそれには耳もかさず益々勇敢に奮闘して、一人も餘さず目茶目茶に踏み潰ぶしてしまひました。此の騒ぎに、澤山の見物は蜘蛛の子を散らすやうに、我先きと戸外に逃げ去つて、卜猿はキヤツキヤツと悲鳴をあげて、屋根の上に飛び上がりました。日頃から騎士に付き從がつてゐるサンチヨですらも、未だこんな乱暴を見た事がないのでワナワナ慄えてそこに立ち縮んでしまひました。

敵を皆殺しにすると、ドン・キホーテはやゝ落ちついて、

『若し今少し余が遅れたならば、ドンドラの命は危なかつたのぢや。武者修業萬歳！』

ンドラ・ガイフエロス並びに、彼の妻メリセと、大聲で云ひますと、ピーターは情無ささうにため息を吐いてつぶやきました。

『あアあ、ほんとに武者修業萬歳だ。しぢや、俺も今日から河原乞食か。』

サンチヨは流石に氣の毒に思つて、もう俺も殺されたと同じ事だ。人形無『親方泣いちやいけねえ。氣を確かに持つだ。俺の旦那が正氣に歸へりや、錢拂ふだからな。』

『人形の損害さへ拂つて呉れりや、それで何も文句はないんだが。』

と、二人が話してゐるのを聞くと、ドン・キホーテは

「何だと？　ピーター。余が汝にどんな悪い事をした。」

と、つめ寄りました。

「いえ、私の身には傷一つ負はなかつたけれど、まあ此人形をご覽なさい！」から云つてピーターの指さすのを見て、ドン・キホーテは初めて自分の今した事が、はつきりと解かりました。

「ううむ……又もや魔法つかひに欺されたか！　此の芝居は余の眼には確かな事實となつて映つたのだ。余は決して乱暴を働らいたのではない。騎士たる者の義務を果したつもりだ。しかしピーター、汝の望みによつて、此の壞はれた人形の損害は全部余が拂つてやらうから安心せい。」

ピーターはドン・キホーテの言葉を聞いて安心いたしました。

「へい、どうも相すみません。有難たうございます。」

これで、この騒動は終りを告げましたが、もし、ドン・キホーテが、此のピーターこそは何時か山中でサンチョの驢を盜み取つた山賊だと云ふ事を知つてゐたなら、定めてもつと痛快な事を仕出來したに相違ありません。

七

主從の公爵訪問。サンチヨの總督任命。

數日の後、ドン・キホーテとサンチヨとが何時ものやうに馬を驅つて居りますと、四五人の人々のやつて來るのに出會はしました。

サンチヨはこの人々を見ると、大聲に驢の鳴き眞似をしました。するとその人々は、自分達を侮辱したと大いに怒つて、サンチヨを驢から引摺り降ろして、慘々袋叩きにして行つて了ひました。サンチヨは口惜しくつて口惜しくつて、又痛くつて耐りません。潮との事で驢にのると、メソメソと主人に向つて云ひました。

『俺ア馬鹿に生れ付いたいから仕方もねえだ。今更かしこくなり度くもねえが、何時迄も旦那の尻にばかり喰ついてポカポカして、まずい物喰つて、うまくもねえ酒飲んで暮すよりか、妻子の所に歸えつてその面倒でも見てやる方がえゝだ。夜だつて小綺麗な部屋に、ゆつくりと寢られるでなあ。』

『おいおい。そんな心細い事云ふもんぢやない。しかしお前が是非とも妻子の許に歸へり度いと云へば、まさか余がそれを止める譯にも行くまい、なあサンチヨ。お前に預けてある金の中から、お前の給料を計算して差し引くがいゝ。』

『旦那、俺ア百姓してる時分にあ、もらつて食つた上、月々五圓づゝ戴いてゐましただ。旦那はいくら拂つて呉れるつもりか知んねえが、從者てえのは百姓より骨が折れますだ。百姓してりや一日中どんな苦しい仕事したつて、

晩にはうめえご馳走にありついて、樂に寢られるだが、俺ア旦那の從者になつてから一度だつてご馳走戴いた事も樂に寢た事もねえだ。俺ア毎日チーズの殻と、黴びたパンの屑とを喰つて水ばつかり飲んで、夜が來りや毎晩固い地べたに寢て來たゝからなあ。』

『ちや一體いくら欲しいと云ふんだ。』

『旦那、賃金としちや月々五圓五十錢も戴けば結構だが、この上に、そら何時か約束した島を俺アもう諦らめるだで、その代りに一圓五十錢も戴かれねえだらうか。』

『いいとも。初めつからの賃金をすつかり計算して、その金の中から差し引くがいい。』

『だが旦那、島の代金てえのは、俺と旦那とがあの約束をしてから數えて、毎月一圓五十錢の割で戴く事にしてえだが……。』

『ふうむ。あれから一體どれだけの月が經つたかなあ。』

『はてと、確か二十ケ年に二三日足りねえだか、餘るだか位えの所だと覺えてゐますだ。』

サンチョの突拍子もない言葉を聞いて、ドン・キホーテは噴き出して了ひました。

『はツはツはツ……。あれからは未だ、漸つと二た月經つてゐないちやないか！　お前は余の金を皆せしめるつもりだな、サンチョ。それならそれでよし、呉れてやるから皆持つて行つてしまへ。お前見たいな横着者を連れてるよりか、一錢なくとも一人の方がいいんだ。暇をやるからさつさと離つてしまへ。世界中で一番いい島の總督にしてやらうと、いよ〳〵決心しかゝつて

ある矢先き歸つて行かうなんて、お前も可愛さうな奴だ。蜂蜜は驢の口には合はぬとの諺は眞ぢやのう。お前は驢のやうに生れて、驢のやうな生活をして、又驢のやうに死んで逝くのだ。が、お前にはそれが解るまいのう。」

可愛さうに、サンチョは眼に涙をうかべて主人の云ふ事を聞てゐましたが、

「旦那樣、ほんとに俺ア尻尾こそねえが驢と同じ事んだ。もし神樣にお祈りして尻尾が出來るものなら俺ア一生驢になつて旦那に忠義を盡しますだ。どうか俺の子供の事や、馬鹿の腦つきり持つてゐない俺の事も考へて見て下さりませい。時折俺がつまらん事云ふのは、そりや皆馬鹿の腦の故だで、どうかゆるしてやつて下さりませいよ。」

とおろおろ聲で答へました。するとドン・キホーテは、

「うん、それで解つた。今度だけはゆるしてやるぞ。さあ元氣を出せ。時さへ來れば島の總督にしてやるからな。」

とサンチョを慰めました。サンチョは、今から一生懸命働らく事を約束しました。二人は又森林の中に馬を進めて行つて、その夜は森林の中の大木の根元に泊りました。

それから數日の後、二人が森林の端の方を通つてゐると、四五人の者が馬に騎つて來るのがみえました。その一行が近づくに從がつて、その中に、綠色の衣を著て立派な牝馬に騎つた一人の貴婦人の交つてゐる事が解りましたドン・キホーテは早速サンチョを顧りみて、

『サンチョ、向ふから近づいて來られるあの貴婦人の許に行つて「ライオン騎士身を低うして遙かにお迎へ致しまする。ご來臨下されば此の上なき幸」

と、申せ。言葉を丁寧に、云ふ事を間違へてはならぬぞ。」

と、命じました。サンチョは直ぐに驢を飛ばして、その通りを貴婦人に傳へました。この貴婦人と云ふのは實は公爵夫人で、公爵も矢張りそこに居られたのです。お二人とも兼々ライオン騎士の武勳を聞き知つて居られましたので、こんな騎士に會つてもいいものかと御心配になりました。が。結局お會ひになる事になりました。

サンチョは有難い公爵夫人のお言葉を受けて、大喜びてドン・キホーテの所に戻つて來ました。ドン・キホーテは、公爵夫人に挨拶して、その手の甲に接吻の禮をする爲に、鞍の上に威儀を正して、しつかと鐙をふん張り、ロシナンテの胴腹をポンと蹴つて進んで行きました。

ドン・キホーテが公爵夫人の眞近に進んで今將に馬を降りやうとするのを見たサンチョは、旦那の鐙を押さへてゐなければならない事に氣がついて、あはてて驢を飛び降りました。すると運惡るく荷鞍の繩に足をからませたものですから、ヅシン！　と頭と肩とが地べたに落ちたつきり、バタバタ藻がきながら驢の背からぶら下がつて了ひました。

ドン・キホーテはこれを知りませんから、何時ものやうにサンチョが鐙を押さへてゐるものとばかり思つて、全身の重みをグツと片つ方の鐙に移して馬を降りやうとすると、運の惡るい時は仕方のないもので、今朝サンチョが十分に肚帶を締めてなかつたものですから、身體の重みで鞍がクルリと馬の腹の方に廻つたからたまりません。しまつた！　と思ふ間もなくズデンドーと横倒れに落馬してしまひました。急いで起き上がらうとしても、甲冑の重みで起き上がる事が出來ません。面目の丸潰れになつた腹いやせにカツとサ

ンチョを呶鳴り付けましたけれど、こちらも鞍からぶら下がつてゐると云ふやうな工合ですからどうする事も出來ないのです。

公爵はこの有樣をご覽になつても、少しで噴き出すところでしたが、お侍きの者に命じて二人を助け起こさせました。ドン・キホーテは起こしてもらふと、鹿爪らしく公爵夫人に挨拶いたしました。

やがて、思ひがけなくも公爵の招待で、二人はそのお城に伴はれることになりました。城に著くと、公爵夫人はサンチョの饒舌を面白く思つて、色んな事をしやべらせて樂しまれました。サンチョは、こりやきつと大變な ご馳走が出るに違ひないと思つてこの上もなく喜びました。

その日の夕食後、公爵はサンチョが島の總督にしてもらふ約束があると聞いて、公爵の領地の中の一つの島を與へてやらうと申し出ました。サンチョ

は喜ぶまいことか、

『俺を總督樣にしてみなせえ。お前え樣方びツくらさせてやるべえよ。立派に從者を務めた人間は總督樣になつても違つたもんだで。』

と云ひますと、公爵夫人は笑ひながら、

『だからお前のお好きな島を戴くといゝでせう。そしたら、お前はその島の總督になるんですからね。』

と答へました。サンチョはペコペコして夫人の手の甲に接吻して、ついでに『ダップル』の面倒もよく見て呉れるやうにと賴みました。

『ダップルとは誰？』

『ダップルたお俺の驢の事んだで。』

『あらさう。ではダップルの面倒も、よく見させて置きませうね。ダップル

がお前のそんなに大切な寶なら、私の眼の中に入れて上げてもいゝのよ。』

『うんにや、厩の中さ入れて貰らへば、それで結構だでな。』

『ではお前が島の役所に行く時には、ダップルも一緒に連れて行つたらどう？　島ではお前のいゝやうに可愛がつてやつて、何なら唯遊ばせて置くもよからうしね。』

『へい夫人。俺アこれ迄にも驢を役所へ連れて行くのを度々見た事があるだで、俺だつてダップルを連れて行つてもいゝだでな。別にちつとも可笑しい事はありましねえだ。』

公爵夫人は他愛もないサンチョの言葉をきいて、ほゝ笑まずには居られませんでした。

公爵と夫人とは、お二人つきりになると、どうかしてドン・キホーテとサ

ンチョとに大きな面白い芝居をさせて樂しみ度いものだと相談致しました。そして此の後、此の本に書き切れない程のいろんな芝居をさせて樂しまれました。

サンチョを島の總督にすると云ふのも、實は公爵が面白い芝居見たさの惡戯だつたのです。

公爵は新らしくサンチョ總督の部下に任ぜられた人々に、いろんな心得を說き聞かせ、サンチョに向つては、島民が新らしい總督のお著きを待ち焦がれてゐるから直ぐ出發の用意をするやうにと云ひました。

サンチョは有難たさうに頭を垂れて云ひました。

『俺ア一生懸命やりますだ。總督樣になりや俺みたいなならず者でも天國に行かれますでな。俺が小屋を棄てゝ總督になるのは、俺の慾心から出た事ぢ

やありましねえだ。俺にだつて總督様になられるだけの智慧はあるだつてことを、天下に知らせて呉れるつもりだでな。』

公爵は云ひました。

『こりやサンチョ。民を治め、又民に崇められるといふ事は、それはそれは面白い事ぢやぞ。汝も一度やつて見れば、終生その味を忘れる事は出來まい。』

『公爵様、それや確かでござりやするだ。羊の群を連れて廻はる事が、もう何とも云はれねえ面白い事だでな。』

『サンチョ、汝はよつくそこに氣がついたの。汝の智慧を絞つてその腕を揮ふんだぞ。ぢやいよいよ明日は出發と決めて、今日はお午から種々の必要品の準備をさせて、それと共に總督の禮服も作らせる事にしよう。』

總督の禮服ときいて、流石にサンチョは一寸變な氣持ちになりました。

『公爵様、俺アまだ唯のサンチョ・パンザだで、總督様の服なんぞ要りましねえだ。』

『それは尤もだ。だがな、我々はその位階に從がつてそれぞれ制服を著けなくてはならないのぢや。法律家が軍服を著たり、軍人が牧師の服を著てはおかしいからの。サンチョ、汝は文官、武官兩方の服を替る替る著なくてはならないのだ。總督ともあれば、文武兼備の者でなくてはならないでの。』

『文武兼備つて俺ア高い聲ぢや云ひ憎い事んだが、イロハのイの字も知りましねえだ。もらつた物は死んでも放さねえだけの腕つぷしは持つてるだが、これでよかんべえか。』

公爵とサンチョとがこんな話をしてゐる時、ドン・キホーテはサンチョが直ぐに總督になつて島に出發すると聞いたので、サンチョを捜して此處に這

入つて參りました。ドン・キホーテはサンチョを見付けると直ぐに、主たる者が下々の民に對する時の心得を熱心に說き聞かせました。

『おゝ我が子よ。第一に神を恐れよ。神を恐れるは智慧の始めぢや。智慧さへあればどんな時にも迷ひはしないからな。次には、お前が今迄踏んで來た道を夢忘れてはならぬ。お前が國で豚飼ひをしてゐた時分の事を思ひ出せば贅澤なんか出來まいからの。』

『旦那、一々有難たく承はりますだ。だが、俺が豚飼ひしてたのは未だ子供の時の事で、大きくなつてからは、鷲の番人してましただ。とに角生れの賤しい者は矢張りど偉らくあならられねえだ。』

『如何にも左樣。しかしな、お前が賤しい百姓の生れだと云つて何もそれが恥ではないのだ德を積めよ。德高きは生れの高きに優るんぢや。お前の親族の貧乏な者が訪ねて來れば、嫌がつたりしないでよつく歡待してやらうし、その他貧乏人に對しては、譬ひ法を曲げても同情してやらなくちやならぬ。法を曲げると云ふ時があるとすれば、それは富んだ人から賄賂をもらふ時でなくして、貧乏人に對して同情する時でなければならぬ。すべて政治は、事情の眞相をよつく確かめた上ですることが肝要ぢやぞ。』

この外いろんな心得を話した上、サンチョの惡い癖に就いても、爪は何時も短かく剪つて、服はきちんと著てゐないと、お里が解るとか、六人の侍從が欲しいと思つても三人位で我慢しろとか、葱葫の類は臭いから決して食はないやうに、食事は總て控え目に、歩く時はバタバタせず靜かに歩き、人の話す時は餘り遲くても困るが、それかと云つて餘り急き込まないで落ちついて話し、決して大酒を飲まないやうにとか、くだくだしく注意しました。

サンチヨは默つて聞いてゐましたが、餘り注意の數が澤山過ぎるので困つて了ひました。

『俺アそんな事一々覺へられねえだで、旦那一筆記してもらふべえか。俺アちつとも讀書きの出來る譯でねえが、總督樣になりや牧師さんを一人傭つてその時々に讀んでもらふつもりだで。』

『何、讀書きが丸で出來ないと？　はてさて困つたものぢや。總督ともあらう者が恥かしい事ぢやのお。せめて名前だけでも書かれるやうに余が敎へて遣はさう。』

『旦那、俺ア自分の名前だけは立派に書かれますだ。まだ國で料理番してた時分、友達が箱の上に俺の名前だと云つて書いた字を手本にして稽古しましただから。その外のむづかしいものを書く時には、右の手に負傷したやうに見せかけて代筆で濟ませるだ。何事だつていろいろ方法はつくものだでな。俺ア權力が出來たら何でも自分の思ひ通り好いたやうにやるべえよ。さうとも、お金持ちのする事はくだらねえ事でも世の中の者は感心するだから、俺だつて總督樣にもなりお金も出來、その上威嚴をとつてりや何一つ不自由はしねえだ。俺の婆さんもさう云つてただ。人間てえ者は、お金が出來れば出來る程値うちが上がるもんだでな。』

ドン・キホーテは、サンチヨの此の圖太い言葉を聞いて呟嗚りつけました。

『何といふ恥知らずめ！　もつと言葉を愼しむんだッ。お前がうまく民を治めて呉れないと、余迄が赤恥をかく。余は既に云ふだけの注意をして義務を果したから安心ではあるが。神よ、常に彼と共に在して彼の島を守り、又彼が、島民を目茶苦茶にしはしないかとの我が懸念を取り拂ひ給へ！』

サンチヨはかうドン・キホーテに叱り飛ばされると俄かに悄げ返つて、

『旦那、お前えさまがそんなに此の俺を總督様に向かねえとおつしやりや、俺アもう止すべえ。總督様になつてご馳走食べてる氣で、パンと葫とを食つて唯のサンチヨで一生暮らすべえ。寢てる間は總督様も貧乏人も誰もかも何んにも知れねえだ。だが旦那、よごわすかい、此の俺を總督様にしてやると最初に云ひ出したのは旦那でがすよ。俺アもう總督なんぞになり度くねえ。總督様になるよりか兀鷹になつた方が増だ。總督様にしてもらつて、地獄に落ちるよりか、俺ア唯のサンチヨで天國に行きてえんだ。』

と愚痴をこぼし始めました。ドン・キホーテはこれを聞いて、

『サンチヨ、よく云つた。そこだ、その言葉は、お前が百の總督になるにも適した立派な人間だと云ふ事を證明してゐるのぢや。』

と叫びました。

翌日のお午過ぎ、サンチヨは立派な金ピカの服を著せてもらつて、騾にのつて、多數の家來に護られて、いよいよ島に向つて出發いたしました。サンチヨの後からは、美くしい絹の馬飾りで被はれたご自慢のダップルが續づきました。しばらくして行列は公爵領の人口一千ばかりの小さな町に到著いたしました。此の町こそ今から後、彼が總督として住まふ可きバラタリア島であるとサンチヨは敎へられました。行列が町の門に到著すると、バラタリアの重だつた役人達は、うやうやしく新總督を迎かへ、町には賑やかに鐘が鳴り渡つて、島民はウワーッと一齊に總督萬歳を唱へました。サンチヨは此處で町の門の鍵を役人の手から受け取つて、それから誓の爲に敎會に導かれました。

サンチヨは根が肥つちよで短かいものですから、美くしい服を何枚も著せてはもらつたが、餘り澤山著せられたので、ますます横つ廣くおかしな格好になりました。サンチヨが總督になつたのは公爵の惡戲芝居だといふ事を知らず、ほんとうの總督樣だと思ひ込んでゐる人々迄が、笑ひこけずにはゐられなかつた程でありました。

敎會での誓の式が終ると、こんどは裁判所に導びかれて、直樣裁判官の事務を執る事になりました。サンチヨが裁判所の大きな椅子に椅るか椅らないかに、二人の男が這入つて參りました。その一人は百姓で、一人は仕立屋らしく手に鋏を持つてゐます。

その仕立屋は、サンチヨに向つて訴への事情をのべました。

「總督樣、實はこの男が昨日私の店に布を持つてやつて參りまして、これで帽子が一つ出來やうかときゝますので、私は寸法を計つてみて、出來ますと答へたのです。するとこんどは、二つ出來まいかと云ひますので、又寸法を計つてみて、出來ますと答へました。それからこの男がきく儘に、三つ四つ五つ迄出來ますと答へたのです。さて今日此の男が帽子をとりにやつて參りましたので、五つの帽子を渡しましたが、彼は仕立賃を拂はないばかりか、布を返へすか布の代金を吳れろと無理な事を云ふのです。」

サンチヨは仕立屋にきゝました。

「それは眞だかの？」

「へい、それに相違ございません。この男の持つてゐる帽子をご覽下されればわかります。」

と仕立屋は、百姓に帽子を出させてそれを五本の指に一つづつ持つて見せ

ました。

『ご覽の通りでございます。この外私は一寸の布もかくしては居りません。』

サンチョはしばらく考へてゐましたが、

『この件は普通裁判で直ちに判決する。判決はかうだ。仕立屋は仕立賃を損し、百姓は布を失ひ、出來上がつた五つの帽子は皆囚人に呉れちまふだ。』

と名裁判を下しました。

判決があつたので百姓と仕立屋とがすごすご出て行かうとした時、今度は老人か二人這入つて來ました。その一人は杖を携さへてゐるのです。もう一人の老人は訴へました。

『總督樣、しばらく前の事、私は親切から此の老人に、請求次第返濟してもらふ約束で金貨百圓を貸してやりました。彼の不如意を良く知つてゐる私は

しばらく請求いたしませんでしたが、今必要があつて請求いたしますと、どうでせう、此の老人は、借りた覺えがないとか借りたにしろ、もうとつくに拂つてしまつたとか言を左右して返へして呉れないのです。私は證書なんぞもらつてはゐませんが、どうか此の老人に約束を守るやうにお云ひつけを願ひます。もし彼が此處で、金は借りてはゐないと誓ふ事が出來るなら、私はもうあきらめてもいいのです。』

これを聞いたサンチョは、杖の老人に云ひました。

『その老人、お前の云ひ分はどうだ。杖なんぞ持ち込みやがつて！』

『へい、確かにその金は借りたには相違ございません。が、それは既に返濟して了つたのでございます。總督樣がその事を誓へと申さるるなら、私は今でもお誓ひ致します。』

杖の老人がかう云ふと、サンチョは誓へといふしるしに、裁判官の十字架の笏をのべました。すると杖の老人は持つてゐた杖を他の老人に渡して置いて、笏に兩手をつけて、金は借りた事は事實だが、その借金は既に返濟した、しかしかの老人はそれを忘れてゐて返金を催促したのだ、とキツパリ誓ひました。

サンチョは、金を貸したといふ老人に向つて、云ふ事があれば云へと促がしますと、その老人は、多分それに相違なからう。なぜなら、杖の老人も萬更嘘を誓ふやうな人間でもなし、又何時どんな風にして返濟してもらつたのか自分が忘れて了つたのかもしれない。今後再び金の請求はしないと答へました。

すると杖の老人は、此の老人から杖を取り戻して、二人は連れ立つて裁判所を出て行きました。

二人が出て行つたあとで、サンチョは額に手をあてて頭を傾げてしばらく考へ込んで居りましたが、突然侍從に向つて

『今の二老人を直ぐ連れ戻つて來い。』

と、命じました。二人の老人が戻つて來ると、サンチョは杖の老人に向つて云ひました。

『一寸その杖を貸せ。』

『さあどうか。杖はこれでございます。』

サンチョは杖を受け取つて、それを他の老人に渡して云ひました。

『さあこれを持つて行け。これでお前の請求した支拂はすんだのぢや。』

するとその老人は不思議さうに尋ねました。

「これは又どう言ふ譯でございますか？　この杖に百圓の値があるとでも申されるのですか。」

「如何にも左樣ちや。でなかつたら余は世界一の馬鹿者ぢや。」

サンチョはかう言つて椅子の上にそり返へりました。そしてその杖を皆の眼の前で折らせますと、中から金貨が百圓コチンコチンと床の上に落ちて轉がりました。

杖の老人が金を返濟したと云つたのは、こんな意味であつて、もしサンチョの頓智がなかつたなら、金を貸した老人は、まんまと百圓してやられるところだつたのです。

それからといふものは、島民は此の新らしい總督を大昔のソロモンの再來だと賞め讃へるやうになりました。

しかし實を云ふと、サンチョは前に此の裁判と同じ話を聞いた事があつたので、それを思ひ出して早速應用したに過ぎなかつたのです。

かくの如く島民には大變うけがよかつたけれど、サンチョはこの島に居つても餘り幸福ではありませんでした。それといふのは總督なのにもかゝはらず、餘りご馳走が喰べられなかつたからです。

食事の時、折角サンチョの食べかけたご馳走も、侍醫は、此を召し上がると身體の爲よくありませんと云つて、一度の食事中二度も三度も皿を下げさせました。鳥のロース焙きのやうなご馳走までも、これは閣下の召し上がれるやうなものではありませんと云ふのでした。サンチョはとう〳〵ブンプン怒つて、

「侍醫！　たつた今此處出て行けッ。グズグズしてるとお前え始め島の醫者

を皆棍棒で叩き出すぞ、さあ何してるだ。椅子で頭叩き割るぞ。余の喰いてえもの食はせるか、さうでなかつたら余が出て行くか。ろくろく食ふ事も出來ねえやうな所は鬻豆二つの値うちもねえだ。」

と、激げしく侍醫を喚鳴りつけました。

サンチョの見幕に驚ろいて、侍醫はこつそりと出て行きましたが、それと入れかはりに公爵からの急使が這入つてまゐりました。急使は息を切らして敵がこの島を襲撃しやうとして、總督暗殺の目的で、すでに四人ばかりの間諜が此の島内に入り込んだらしいから、大いに警戒しなければならない。食物の如きも、食卓に並べられたものは一皿も食べてはならない。毒殺の恐れがあるからと公爵からの注意を傳へました。勿論これも公爵の惡戲なのですが、サンチョは慄え上がつてしまひました。そして直樣料理番をつかまへて、

「いいか、大急ぎであの侍醫を牢の中に投り込むだ。余を毒殺しやうと計る奴は彼の外ない。それから、食卓にら、パンと干葡萄とを四五斤持つてねえだらう。余も食はずには生きて居られぬ。」

と、云ひつけました。

さて、サンチョがバラタリア總督となつてから既に七日は經ちました。毎日の政治や裁判に疲れ果てゝゐる上に、毒殺を恐れて食事もろくろく出來ないので、飢じさにグツタリしてその夜も倒れるやうに床に就きました。それから何時間たつたかわかりませんが、丁度眞夜中とも思はれる時分、けたゝましい人の叫び聲、澤山の人のドヤドヤ走る音にサンチョは眼を覺されてし

まひました。そして何事かと驚ろいてベッドの上に跳ね上がりました。ガランガランと鳴り響く警鈴、物凄い太鼓の音、けたゝましい喇叭の音、人の悲鳴は町中に響き渡つてゐます。サンチョはもう生きた氣もなくガタガタ慄え出しました。漸やく勇氣を鼓して床の上に飛び降りてスリッパを引つかけるのもそこそこ、ドアーを押し開けると、二十人ばかりの人々が手ん手に炬火を振りかざし劍を抜いて、

「總督殿！　早く甲冑を著けて下さい。どうどう敵は島内に侵入して了ひました。閣下の指揮がなくては味方は皆殺しにされて了ひます。早く！　早く！」

と、叫んで驅け込んで來るのです。サンチョは調子つ外れの大聲で答へました。

「甲冑？　余がどうして甲冑なんぞ持つてるだ。余の主人ドン・キホーテを呼べ、一擊の下に敵を全滅させてくれやう。余は不肖にして戰爭の事はちつとも知んねえだで。』

「いいえ。閣下ご自身甲冑を著けて我々味方の軍を指揮して下さい。甲冑は此處にあります。』

人々は尚も叫び立てます。で、サンチョも仕方なく、

『では甲冑を著せてくれい。神よ武運をたまへ！』

と滋々承知いたしました。人々は滅法界大きな大楯を二つ持つて來て、大急ぎでシャツの上から一つは前、一つは背に當てゝ、強い綱でグルグルと、足を動かす事も出來ない程強く結はへ上げて、槍を持たせて、さあ進軍とせき立てました。

『進軍？　こんなに結はへて膝曲げる事も出來ねえ。これで進軍が出來るけえ。余を運んで行け。』

とサンチョが云ひますと、一人は、

『何動かれない筈はないでせう閣下？　危險は刻々迫つて來ます。さあ早く！』

と意地惡く叫びました。可哀さうにサンチョは歩きかけては倒れ、歩きかけては倒れ、その度毎に身體は碎けるやうに痛んで、丁度甲羅の中の龜みたいな格好でころころ床の上に轉がりました。

突然、炬火がパッと一齊に消え去ると思ふ間もなく、この宮殿の中も遂に修羅場と化してしまひました。劍戟の響、もの凄い悲鳴は俄かにサンチョの身邊から起こつて、サンチョの著けてゐる大楯は幾度かカチンカチンと斬り

つけられました。サンチョは楯と楯との間に縮み込んで、危険から救はせ給へと一心に念じました。しかし戰は增々激げしくなるばかりで、何者か彼に躓づく者があると思へば、バッタリ倒れかゝる者がある。甲羅の上に飛び乘つて、味方の軍を叱咤しつゝ指揮するものがある。……もうサンチョは全く生きた氣もなくジッと眼を閉ぢてゐます。そして、此の島が敵の爲に占領されるも、自分が殺されるも皆神のみ心の儘だと最後の覺悟を決めた時はからずも、

『勝利！　勝利！　閣下、大勝利ですぞッ。』

と、味方一同の勝鬨が嵐のやうに起りました。憐れな總督は勝利と聞いて

『起してくれ、誰か起してくれ。』

と、力ない聲で云ひました。そして皆の者に助け起されると、殘念さうに

つぶやきました。

『若し余に腹心の友があつたら、毒のない葡萄酒一杯飮ませてもらふんだがなあ。喉が渇いて耐らねえ。』

やがて甲羅をとり外してもらつて、サンチョはドッカリと椅子に椅りました。すると、日常の疲勞の上に此の戰で非常に心を痛めたものですから、その儘バッタリと人事不省に陷つてしまひました。此の罪深い芝居をした役者達も、流石に心配していろいろ介抱いたしました。サンチョがやつと正氣付いたのは、もうお午頃でした。サンチョは正氣に復ると、一言も云はずに、古い服を着て這ふやうにして厩に行つて、ダップルの首を抱きながら接吻して、

『さ、ダップルや、行くべえ。俺とお前えとたつた二人つきりだと苦勞も少ねえだ。』

と、云ひました。さうして、澤山の人々が取り圍んで見てゐるのに、誰も助けて騎らせてやる者がないので、身體中ヅキヅキと痛むのをやつと我慢して荷鞍に跨がると、憐れつぽい聲で一同に別れを告げました。

『皆樣左樣なら。俺ア昔の俺に歸えるんだ。俺ア總督樣に生れ付いたぢやねえだ。夏は樫の木の影に長々と寢そべつて、冬になりや毛皮でも著て氣儘にしてた方が、總督樣になつて軟らけえ夜具で寢て綺麗な着物著るよりかどれだけいゝだか。公爵樣にも申して呉んねえ。俺ア一錢持たずに來たで、一錢も持たずに歸えるだ。他の總督樣見てえな卑しい眞似はしねえつてな。俺ア損も得もねえだ。さ、ちつとそこ退いて呉んねえ。』

かうしてサンチョは、此の大芝居の間、公爵の城に滯在してゐたドン・キホーテの所に獨りトボトボと歸へつて行きました。

八

牡牛との闘。白月騎士との一騎打。ドン・キホーテの最後。

サンチョが總督を止して歸つてから間もなく、彼とドン・キホーテは公爵の城を後にして、又もや武者修業に出ることになりました。

サンチョは公爵家の家令からもらつた二千圓の金を大切に持つて居りました。城を出てからしばらく行つて、ある森の中迄來ると、そこには五六人の若い男女が、羊飼ひの著物を華やかに著飾つて遊山をして居りました。

若い人々は二人の姿を見ると、しばらく遊んで行けと頻りに勸めるので、二人も勸められるまゝにご馳走になる事になりました。

ご馳走の最中、ドン・キホーテはツと立ち上がつて、一體恩を忘れる程深い罪はない。今日二人があなた方から受けた好意をどんなに喜んでゐるか言ひ表はす言葉がないが、自分は唯自分の武力でもつてそれを示す事にしやうと云ひました。そして續いて、

『余は丸二日間、此のサラゴッサへの大道の眞中に立つて、此處に羊飼の娘に假裝して居られる娘さん達が、余の姫君たるトボソのダルチニヤ姫をのぞいては世界一の美人でゐらつしやる事を通行人に知らせるとしよう。』

と、云つて、ロシナンテに跨がつて、その大道の眞中に騎り出して行きました。そこで、來る人を一人一人誰何してやらうと待ち受けて居りますと、間もなく向うの方から一群の騎手が、或る者は手に槍を携へて全速力で驅けてきました。よく見ると騎手達の前には、恐ろしい數匹の野牛が、長い角を

振りもの凄い聲で吠えながら追はれて來るのです。遊山の若者達はこれを見ると、皆大木の蔭に逃げ込んで了ひましたが、ドン・キホーテは勇敢にも、そこに立ち止まつてそれを待ち受けました。

騎手の中の一人は行く手に一人の騎士の立ちふさがつてゐるのを見ると、大聲で

『退いた退いた、危ないッ。牛に突き殺されるぞ――』

と叫びました。ドン・キホーテは退くどころでなく、眞近く迫つて來た野牛に向つて、

『不埒者！　待つたッ、如何に猛惡なる野牛と雖もラ・マンチヤの住人ドン・キホーテはビックともしないぞ。待つたこの野郎！』

と槍を振り廻しました。眞に危機一髪！　騎手達も一言云ふ間もなく、ド

ン・キホーテも身を替はす暇もなく、暴れ狂つた數匹の野牛はダダダッと眞正面からドン・キホーテとロシナンテにぶつかつて、サンチヨとダップルも諸共砂の中に突き飛ばして了ひました。彼等は人も馬も砂の中に倒れたまゝ氣絶してしまひました。しばらくしてドン・キホーテは正氣に復ると、ムックリ起き上つて右によろめき左に倒れつつ大聲を上げて、

『不埒者！　しばらく待つた、勝負！　勝負！』

と、野牛を追つかけました。しかし、かの一隊はそんな事を見向きもしないで、猛烈な勢で驅け去りました。流石の騎士もげつそりしてハーハー息をはづませて、そこに蹲まりました。ドン・キホーテに續いて正氣に復つたサンチヨは、ロシナンテを引き起して騎士の處迄連れて來ました。

ドン・キホーテはこの敗北によつて身體に負傷すると共に、心も弱つて了ひましたが、それでも又馬を進める事になりました。

その晩二人はとある宿屋に泊ることになつて、その前で馬を降りて、馬を厩につなぎました。サンチヨはそこに出て來た亭主をつかまえて、すぐ樣今晩はどんなものを喰はせるかと談判を始めました。亭主は

『へい、もう何でも御注文に應じまして御料理致します。空の鳥地の鳥海の魚川の魚、何でもお好み次第でございます。』

と、答へました。

『そんなにたんさはいらねえよ。チキン二人前でいゝだ。旦那は小食の方だし、俺ア又そんなに腹も空いてゐねえから。』

『チキン？　チキンはまことに御相憎さまです。鷹の奴が雛を皆攫つていつちやつたんで、相すみません。』

「さうか、ちや牝鶏二人前焙つてもらふべえか。軟けえところをな。」

「牝鶏？　それも御相憎さまで。實はたつた昨日五十羽ばかり市場の方に出しましたんで、へい。しかしこの外なら何でも御注文通り御料理いたしますんでございます。」

サンチョは何にしたものかと思案しながら、

「はてと、ちや犢肉か山羊肉としべえ。」

「親方、來週になつたらたんと著く筈になつて居りますんですが、唯今では……これも一寸品切れで……眞にどうも相すみません、眞にどうも……。」

「ちやとに角、卵とベーコンだけ頼むだ。」

「卵？　親方御笑談云つちや困りなすせ。さつき申した通り牝鶏のゐないのにどうして卵のある道理がないぢやありませんか。鶏類はお止しになつて、もつと風味のあるものになすつたら如何です。」

「おやおや！　何か食ひてえんだが、一體どんなものがあるか云つて見ねえよ。」

「さうですなア。正直なところ、まあ犢の脚のやうな牝牛の踵つて云ひませうか、牝牛の踵のやうな犢の脚つて云ひませうか、そんなものが二本ばかり、それにちつとばかりならベーコンもありますんで。」

「脚でも踵でもいいだ。それをもらふとしべえ。」

と、サンチョはそれを注文いたしました。

ドン・キホーテは夕食時には、自分で料理人を連れ肉を持つて旅をしてゐる或るお客と一緒に食べましたが、サンチョはその傍で、亭主と一緒にその踵やら脚やらわからないもののスープを頻りと啜つて居りました。

數日の後、主從二人はバルセロナといふ海岸の町に到著いたしました。ところが、ドン・キホーテもサンチヨも未だ海といふものを一度も見た事がなかつたものですから、灣の中に浮んでゐる大きなボートを見て大變驚ろきました。サンチヨは、ボートを大きな獸だと思つて、舷に動いてゐる澤山のオールをその脚だと決めてしまひました。

町に著いて後ある朝の事、ドン・キホーテは清らかな朝の空氣でも吸つて來ようと、いつものやうに甲冑に身を固めて、ロシナンテに跨がつて海岸に出て行きました。すると向うの方からも甲冑を著け槍を携へ、輝やく月の紋章のついた大楯を持つた一人の立派な騎士が駿馬を驅つてやつて來るのです。二人の騎士の間が聲のとゞく位になると、その騎士はハタと馬を止めて大音聲に、

「あいや武勳赫々たるラ・マンチヤの騎士ドン・キホーテ殿！　拙者は貴殿すでに御承知の筈なる白月騎士なる者にして、拙者の姫君の美くしさは到底貴殿のダルチニア姫の及ぶ所に非ざるを誓はしめん爲に參つた者でござる。此の事早々お誓ひあらば敢て闘はず、されど共に闘かつて若し貴殿敗北の節は、甲冑を卷いて國に歸り滿一ケ年は決して武者修業致さざる事、若し拙者の敗北に終る時は、拙者の首は如何いたさうと貴殿の御勝手と致さうではござらぬか。さあ返答は如何に？」

と呼ばはりました。ドン・キホーテは突然の挑戰に驚きましたが、グッと心を押し靜めて嚴かな聲で答へました。

「白月騎士とやら、拙者不幸にして貴殿の御名承はるはこれが初めてなれど、恐らく貴殿は美くしき我がダルチニア姫を見た事は未だ一度もござるま

い。もし一度なりと姫を見た者はかゝる暴言は吐かざる筈。我がダルチニア姫こそは、實に世界に類ひなき美姫なれば、貴殿それは何かの間違ひでござらう。されど是非にとあれば喜んで御相手仕まつらう。いざッ！」

『いざッ！』

と二人の騎士は互にキッと身構へをしました。

丁度この時數名の人々を從がへた此のバルセロナの總督が勢よく馬を驅つて、此處にやつて參りました。此の總督はドン・キホーテの事を兼々聞き知つてゐましたので、此の鬪も誰かに欺まされて芝居でもさせられてゐるんだらう位に思つて、その原因を尋ねました。白月騎士が鬪の原因を答へると、總督はこりや唯の芝居ぢやないと傍に身を避けました。

二人の騎士は、間に少しばかり陣地を距てゝ互に身構へして居りましたが、

エイ、ヤツの懸聲と共にパッと双方から飛びかゝりました。

ロシナンテに比べると、遙かにたくましい白月騎士の馬は、苦もなく忽ちロシナンテ諸共ドン・キホーテを激しく地べたに叩き倒して了ひました。ドン・キホーテが土煙を上げてそこに倒れると、白月騎士はヒラリと馬から飛び降りて、ドン・キホーテの上に馬騎りになつて、喉に劍を擬して迫りました。

「さあ、さき程の事を誓ふか。それとも一突にやつつけやうか。どうぢや？」

ドン・キホーテは深傷を負ひながらもクワッと眼を見開らいて、

『何を？　誰が誓ふものか！　誰が何と云はうと、トボソのダルチニア姫は世界一の美くしき姫君ぢや。さあ刺した、一突に殺した！』

と、叫びましたが、もう息は絶え絶えでした。すると白月騎士は、

『いやいや殺すまい。この戰の前、約束したやうに、貴殿がこの甲冑を卷いて國に歸り、一ケ年の間武者修業を斷念するならば、拙者は滿足ぢや。』

と、云ひました。

ドン・キホーテは、ダルチニア姫の名を傷つけるやうな事さへ云はないならば、國に歸つてもいいと弱々しい聲で答へました。

白月騎士はこれを聞くと直ぐ馬に打ち跨がつて、町の方に驅けて行つてしまひました。

今迄この鬪を見物してゐた總督の部下の一人は、白月騎士とはどんな男か知り度いものだと思つて、その跡を追跡して行きました。

此の白月騎士こそは數ケ月以前にドン・キホーテと鬪かつて、こつぴどく叩き付けられたあの鏡の騎士、卽ちドン・キホーテの友達であるサムソン・カラスコだつたのです。

サムソン・カラスコが、彼を追跡して來た總督の部下に話したところによると、彼がドン・キホーテに戰を挑んだのは、決してドン・キホーテを殺すのが目的ではなくつて、一ケ年も國で靜養すればドン・キホーテの騎士狂も治るだらうと思つたので、國に歸る約束をさせるために、少しいぢめてやつたのだつたさうです。

海岸の戰の場に殘つた人々は、ドン・キホーテを抱き起して兜を脫がせて見ると、顏はもう眞蒼で冷汗をタラタラ流して居りました。

ロシナンテも主人と同じやうに深傷を負つて叩き倒された儘横たはつてゐて、サンチヨは悲しみの餘り言云ふ事も出來ず、惡夢にでも襲はれたかのやうにボンヤリと其處に立つてゐました。

やがてドン・キホーテは擔架にのせられて町に運ばれて來ましたが、それから丸一週間といふものは頭を上げる元氣さへ無く、敗北の口惜しさに滿たされてベッドに横はつて居りました。サンチョは色々とやさしく主人を慰さめてみました。

『旦那、もつとしつかり元氣を出しねえ。骨が碎けなかつた事を有難たく神樣に感謝するだ。もう武者修業は止して、國に歸えるべえよ。』

するとドン・キホーテは床の中から、

『しかしサンチョ、國に歸つてそこで暮すのは一ケ年きりだよ。一ケ年といふ約束の年期が明ければ、余は又武者修業に出るんだ。その時にはどうしてもお前を伯爵にしてやるからな。』

と淋しく答へました。

ドン・キホーテが起きられるやうになると、二人は早速國に歸る事になりました。ドン・キホーテは愛馬ロシナンテに跨がり、ダップルには騎士の今迄著けてゐた甲冑を卷いて負はしたので、サンチョは歩いて出發いたしましたが、長い道中ドン・キホーテの悲しみはちつとも消えませんでした。二人が幾日かの後にやつとラ・マンチャの彼等の家迄歸るとドン・キホーテは、

『ああ氣分が惡い。早く寢かして呉れ。』

と、云つたつきり、再びドッカリと病床に横はつてしまひました。

日一日と衰弱が加はつて來るので、サンチョは一寸も主人の傍をはなれる事が出來ません。六日目にお醫者さんが診察に來た時、お醫者さんは、もう全くの重態ですと云ひました。ドン・キホーテはお醫者さんの宣告を靜かに聞いて居りましたが、やがて、少し眠いから一人でゐさせて呉れと云ひまし

た。姪とサンチョとは大變泣き悲しんで、病室を出て行きました。ドン・キホーテは深い深い眠におちました。しばらくの後眼を覺したドン・キホーテは凛とした聲で、

『神樣！　感謝いたします。憎む可き書物によつて、慘々汚がされて居つた私の心は今漸やく淨められました。かゝる書物の害が初めてわかりました。死の手は刻一刻と私の上に近づきつつあります。しかし私は不面目なる元の氣狂の儘で死ぬのではありません！　おい誰かゐるか。辯護士を呼んでくれ。遺言をするから。』

と叫びました。

ドン・キホーテはサンチョに少しばかりの金を與へて、殘つた財產の全部を彼の姪にのこしました。遺言が終るとその儘床の上に倒れて昏睡狀態に陷

いつてしまひました。かうして三日の後、死の手は遂に彼の上に置かれ、前の騎士、ラ・マンチャの住人ドン・キホーテは、善良なる勇氣ある一人の老紳士として靜かに死んで逝きました。

（をはり）

グリム童話

ルムペルスチルツキン

昔、大層美しくて利口な娘を持つた水車屋がゐました。水車屋は何時も、自分の娘は不思議なことができるといつて、自慢してゐました。

或日、水車屋は用事があつて、王様に逢ひに御殿へ參りましたが、偉い人間だと思はれて見たかつたので、勿體ぶつて、

『王様のお納屋には大變よい藁がありますが、私には藁を黄金にすることの出來る娘があります。』と申し上げました。

すると、何よりも黄金をお好みになる王様は、

『さうか、それは善い娘を持つたものぢや。一時も早く、その娘を宮中へ遣してくれ。私はお前の娘が、どういふことをするか、早く見たいものだ。』と申されました。

水車屋は王様の言葉を聞いて、これは自慢し過ぎたと思ひましたけれども王様の命令ですから拒む譯に行かず、早速娘を連れて、御殿に戻つて參りました。王様は直ぐに、娘を藁が一杯入つてゐる大きな部屋に連れて行き、腰掛と紡車を渡して、

『可愛い娘さん。この藁を黄金に變へて御覽。私は明日の朝、こゝに來るが、若しこの藁が黄金になつてゐなかつたら、私はお前さんを死刑にするよ。』と申されました。

可哀想に娘は坐つたまゝ、困り切つて泣きました。娘は、今まで藁から黄金を紡ぐといふやうなことは、聞いたこともありません。

娘はどうしたら生命が助かるかと考へながら、眼が見えなくなる程、泣きつゞけました。と、不意に、戸の開く音がしたと思ふと、變な小さな男がぴよん〳〵と部屋の中へ入つて來ました。

『何故、さう泣いてゐるの？　さう泣くと、あなたの美しい眼が惡くなりますよ。譯を話して御覽。私はあなたを助けて上げますよ。』とその小人が申しました。娘は啜り泣きをしながら、

『王様は明日の朝までにこの藁を皆な黄金にしろと仰るのです。そして、それが出來ないと、私の生命が無くなるので、困り切つてゐます。』と申しました。

『もし私が、お前さんのために藁から黄金を紡いで上げたら、お禮に何をくれますね。』と小人が申しました。と娘は喜んで、

『私はあなたに頸飾を差し上げます。』といひました。

すると、小人は、紡車の前に坐つて、藁を紡ぎはじめました。藁はブーン、ブーンと音を立てゝ皆な黄金の糸になり、間もなく光つた黄金の糸がうづ高く積まれました。

『左樣なら。』

かういつて小人は、貰つた頸飾を手に取つてお辭儀をしましたが、娘がお禮の言葉をいはうとした時には、もうその小人は部屋の外に出て行つてゐました。

次の朝になると、王樣は藁がどうなつたかと考へながら、娘のゐる部屋に入つて參りましたが、驚いたことには、藁が皆な黄金になつてゐたので、王樣は自分の眼が間違つてゐるのでないかと、疑つた程でした。併し、王樣は黄金になつた藁を見ると、慾が深くなり、娘を藁の一杯入つた一層大きな部屋に連れて行つて、その藁を黄金にするやうにと、またおいひつけになりました。

『明日の朝までに出來上らないと、死刑だぞ。』と、王樣は申されました。

やつと生命が助つたのにまたかと思つて、娘は紡車の前に坐つたなり前よりも激しく泣いてゐました。娘は小人の紡ぐところを見てはゐましたが、自分ではどうしても、藁から黄金を紡ぎ出すことが出來ませんでした。

すると、入口の戸が開いて、前の晩の小人がまたぴョん〳〵と入つて來ました。そして、

『さア、さア、もう泣くのをお止め！　私がお前さんの手助けをすると、今度は何をくれるかね？』といひました。

『ダイヤモンドの指輪を上げませう。』と娘は喜んで答へました。すると、小人はまた紡車の前に坐りました。紡車はブーン、ブーンと音を立てゝ、間もなく藁は黄金に變つてしまひました。

『有り難う。ほんとに有り難う。』

と娘は叫んで、何か云はうとしましたが、その時にはもう小人は、戸の外に出てゐました。

次の朝、王様がお出でになりました。そして、目の前に積み重なつた黄金を見て、嬉しさに眼を輝かせながら、

『これは不思議な利口な娘だ。』と獨言をいつて、先きの部屋よりもずつと大きな藁の一杯入つた、部屋に娘を連れて行つて、微笑みながら優しさうに、

『この藁を明日の朝までに黄金に變へたら、私はお前をお后にする。』といひました。王様は、世界中を探しても、これ程お金持で、これ程美しい妻は見つからないだらうと、考へたからです。

王様が出て行くと、入れ代りに例の小人がまた入つて來ました。そして、

『お前さんに代つて仕事をすると、今度は何をくれるかね。』と訊ねました。

ところが、娘にはもうやる物が何もありませんでしたから、どうしたらよいかと迷つてゐました。すると、小人が、

『お前さんが、お后となつた時、一ばん先きに生れた小供を私にくれるといふ約束をね。』といひました。

娘はたゞ生命が助かりたいと許り考へてゐましたし、お后になるといつて

も、それはどうなることか分らないと考へましたから、小人のいふ通り約束をしました。

小人はまた藁を紡ぎはじめましたので、天井に達くまで積み上げられた藁が、見る間に黄金になつてしまひました。

何時ものやうに、王様は次の朝、お出でになりました。王様は、積重ねられた黄金の前に坐つてゐる美しい娘を見ると、非常に喜んで、早速婚禮の用意にかゝりました。

王様は美しい着物や光つた寶石を娘に與へて、娘を黄金の馬車に乗せて、二人で一しよに、教會に行つて婚禮の式を濟せました。

お后になつた娘は、俄に幸福な身分になつたために、今までの苦しかつた事をすつかり忘れた許りでなく、小人にした約束のことも、すつかり忘れてしまひました。間もなく、小さな美しい赤ちやんが生れたので、お后は一層幸福になりました。

『私には、もうこの後には、悲しい事なんぞ少しも起らないでせう。』

お后は赤ちやんをしつかり抱きしめながら、かういつたのでした。

が、かういつた時に、戸が鳴つたかと思ふと、藁を紡いだ例の小人がいつものやうに、ぴヨンぴヨンと入つて來ました。

『お前さん、何か用なの?』

驚いたお后は、しつかり赤ちやんを抱きしめて、相手を見詰めながら、かう申しました。

すると小人は、

『私はその嬰兒が欲しいのだ。お前さん約束をお忘れかね。』といひました。
お后は始めに生れた子を小人にやると、約束したことを思ひ出しました。
そして泣き出しながら、
『アー、他の物なら何でも上げますが、この子供だけは取らないで下さい。』
といつて激しく泣きました。で、小人も少々氣の毒になりましたが、小供が
欲しいものですから、
『では三日だけ待つて上げますから、その間に、もし私の名前を當てたら、
その小供を取らない事にしませう。』といつて、急いでぴょん〳〵と出て行き
ました。
お后はその夜眠らないで、今までに聞いた名前といふ名前を思ひ出しなが
ら、床の中で起きてゐました。朝になつて、小人が入つて來ますと、お后は

出來るだけ長い、むづかしい名前をいつて見ましたが、小人は、その名をいふ度に愉快さうに、白い歯を出して笑つて、

『イーエ、それは私の名ではありません。』といひました。

次の日、お后は使者を國中に出して、出來るだけ奇妙な名前を集めさせて小人が現はれると、

『ズビンドレスハンクスですか。スキントアイですか。バンデーレグスですか。』と尋ねますと、小人は無性に喜んで、

『イーエ、違ひます！』と叫びました。

もう後一日しか日が殘つてゐませんでしたから、お后は大層心配になり出しました。そして一層澤山の使者を出して、別な名前を探し出させました。併し、使者達は歸つて來て、もう別な名前がないといひました。しかし、

一人の使者がいひました。

『私は方々名前を探し廻つてゐる間に、山の傍の狐や兎でも恐ろしがつて近よらない森の端に參りますと、小さな赤い屋根の小屋の前で一人の小人が叫びながら踊つてをりました。その小屋の外には火が燃えてをりましたから、小人はたしかにパンを燒いてゐたのです。小人は頭の上に燒きたてのパンを入れた盆を乘せて、踊つたり、跳ねたりしながら、

今日は湯を沸かし、今夜はパンを燒く
明日は后の小供を取る
后は何程考へても
俺の名がルムペルスチルツキンだとはまさか知るまい！

と、うたつてをりました。』

これを聞いたお后は、手を叩いて喜びました。お后はその小人こそ、自分の小供を取らうとしてゐる例の小人に違ひないと思つたのです。

次の日の朝早く、小人は嬉しさうにぴョン〳〵とお后の部屋に入つて來ました。小人はお后には氣の毒だとは思ひましたが、松の森の赤い家で、小供と一しよに棲むことを考へると、ひどく嬉しかつたのです。小人は、手に小供を包むために、白い毛布を持つて來てゐました。

小人は毛布を擴げて、小供を包む用意をしてから、お后に向つて面白さうに、

『さア、どうか私の名を當てゝ下さい。』といひました。

お后も微笑みましたが、わざと、まだ名前を考へてゐたやうな樣子をして

『ウイリアムですか。』と尋ねますと、小人は嬉しがつて、

『イーエ』と答へました。
『では、ジョーヂ？』
『イーエ』と答へて小人は喜んで、片一方の足でぴヨんと飛びました。
『では、ジョンですか。』とお后は、もうこれでお終ひだといつた風に、悲しさうな顔をして申しました。と、小人は毛布で小供を包む用意をしながら、
『イーエ、私の名はジョンではありません。』といつて、笑ひました。
『では、ルムペルスチルツキンですか。』
かうお后が叫ぶと、小人は、
『魔女が、教へたのだ！』と叫んで、がつかりして、腹を立てゝ、ぢたんだを踏みましたが、その拍子に力が餘つて、片一方の足が床に踏み込んでしまひました。そこで小人は兩方の手で、その足を摑んで力まかせに引きますと、足はその儘抜けてしまひました。小人は仕方なく、毛布を持つて、片足でぴヨん〳〵跳びながら、小屋の方へ歸つて行きました。
その後、お后はルムペルスチルツキンを一度も見ませんでした。

狼と七匹の小山羊

小山の後に棲んでゐる小さな家族ほど、幸福な家族はありませんでした。寡婦の羊は、よく働きましたが、七匹の小山羊も性質のよい、孝行な子供でありました。併し、この幸福な家族も小山の前方に棲んでゐる歳とつた灰色の狼のことを考へると、その幸福に暗い影が差し込むのでありました。

さて、母山羊は毎日、乳を賣つて、衣物や食物を買ふために、外に出て行くのでした。七匹の小山羊は、その留守の間、小屋の中に閉ぢこもつてゐなければなりませんでした。

或朝、母山羊が外に出かける時、一番姉の小山羊を呼んで、

『ナンニー、弟や妹をよく氣をつけて下さい。あの歳とつた狼が來たら、どんな事があつても戸を開けてはなりませんよ。』といひました。

『よござんすとも、私はあの歳とつた怪物をよく知つてゐますから、決して戸を開けません。』

『けれども、あの狼はなか〳〵狡猾な惡者だから、狼でないやうな風をするのが上手です。併し、狼は荒ぽい聲と、黒い足を隠すことができませんからよくそれに氣をつけなさい。でないと、あの惡者は、お前さん達を一本の髪の毛も殘さずに引き裂いて、食べてしまひますよ。』

かう母山羊がいひますと、小山羊共は皆な、ハイよく氣をつけますと答へ

ました。そして母山羊が出て行くと、皆な窓に上つて、一列になつて外を眺めながら、手を振りました。

母山羊が外に出ると、歳とつた灰色の狼は、肥えた小山羊の肉のことを考へて喉を鳴しながら、山羊の小屋へやつて來て、戸を叩きました。

『子供達、開けておくれ。お菓子を買つて來て上げたよ。』

狼は、母山羊のやうな風をして、かういひましたが、ビリーといふのが姉に向つて、子と聞いて、躍つたり跳ねたりしましたから、鍵の孔から外を見ました。と、『ナンニー姉さん、早く戸を開けて、お母さんを家に入れてお上げな。』といひました。

併し、ナンニーは母山羊のいつたことを思ひ出して、母の聲は今戸の外でいつたやうな聲ではないと思ひましたから、鍵の孔から外を見ました。と、

そこには狼が立つてゐました。

『狼さん、彼方へ行つておくれ。お母さんの聲はそんな荒ぽい聲ではありませんよ。』

すると狼は尾を垂れて行つてしまひました。しかし、狼はどうしても小山羊を食つてやらうと思ひましたので、聲を優しくするために、藥を買ひに藥屋へ行きました。

藥屋の小僧は、店にあるだけの氷砂糖と棗をくれました。けれども狼は、それを食べたが、まだ聲が優しくならないといひました。そこで小僧は、大きな白墨の塊をくれて、一哩半走つてから、これを一と呑みにしろといひました。といふのは、小僧は早く狼を店から追ひ出したかつたからです。そこで狼は、駈け出して行つて、白墨を皆な食べてしまひました。山羊の小屋に

着いた時には、その聲は、低く、優しくなつてゐました。

『戸を開けておくれ。衣物を買つて來て上げたよ。』

狼はかういつて後足で立ち上つて、前足を窓臺に置きました。

狼の聲は優しかつたのですが、小山羊達はなほびく〳〵しながら窓の所へ駈けて行つて、外を覗きました。すると、窓臺の上には、二本の黒い足が乘つてゐました。

『ヤー、狼だ！　狼だ！　あの黒い足！　戸を開けてはいけない！』と小山羊達は叫びました。

狼は今度も失敗したので、別な計略を考へるために、小屋を離れて前方へ入つて行きました。

『小山羊どもは利口だ。だが、あの肉は旨いぞ。』

狼はかういつて、パン屋へ行つて、

『私は前足に傷を受けたのです。どうか、濟みませんが、粉を振りかけてくれませんか。』といひました。

そこでパン屋は、狼の黒い前足が雪のやうに白くなるまで粉を振りかけてやりました。狼はまた山羊の小屋へ引き返して行つて、

『子供たち、お母さんが歸つて來たよ。早く開けておくれ。』と白墨を食べた優しい聲でいつて、戸を叩きました。と、中から小山羊達が、

『お前さんの足を見せて下さい。』と叫びました。

そこで狡猾な狼は、窓臺の上に白い足を置きますと、小山羊達はそれを見て母がいよ〳〵歸つて來たものと思ひこんで、喜んで躍り上りました。小山羊達は急いで駈けて行つて戸を開けました。と、狼がのつそり入つて來まし